

登場人物

与謝野鉄幹
与謝野晶子

山川登美子

森鷗外

有島武郎
大杉栄

平塚明
伊藤野枝(兼)

北原白秋
増田俊子
中濱いと(兼)

島村抱月
松井須磨子
御園艶子(兼)
千草桃代(兼)

釜ヶ崎利彦
松浦恵

プロローグ

暗い中、一筋の光と共に、与謝野晶子が歩いてくる。晶子は自身の歌集「みだれ髪」の一節を口ずさむ。その歌は、鉄幹への強い恋慕の感情を表したものである。

晶子 くる髪の 千すじの髪のみだれ髪 かつおもひみだれおもいみだるる……1935年、昭和十年3月26日。わたくしの夫、与謝野鉄幹はその六十二年の生涯を閉じました。それは同時に、三十四年間におよんだ、夫婦生活の終わりでもありました。夫、与謝野鉄幹は、1900年、明治三十三年に文芸社東京新詩社の主宰として、文芸雑誌「明星」を創刊しました。明星は後の日本文芸にとつて欠かす事のできない名だたる作家を見出していきます。北原白秋、石川啄木、木下杢太郎、そして、与謝野晶子。わたくしの事です。わたくしと鉄幹は「明星」によつて出会ったのです。鉄幹は決していい夫ではありませんでした。彼との道行きは、——あえて道行きといわせていただきます。平坦なものではありませんでした。お金にも女性にもだらしのなくて、どれだけ苦労させられたことか……。けれど、彼と暮らした三十四年、その年月の中で、たった一つだけ、わたくしには変わらぬ思いがあるのです。私は、彼の明星でありたかった。彼のために輝きたかった。暗い、夜の闇を、仄かに照らす明るい星。儂いけれど、確かにある。美しい、光り輝く星……

星が消えるかのように、晶子は闇に消える。

——暗転

1908年(明治四十一年)、東京新詩社。

机が並ぶオフィスで、北原白秋、増田俊子、中濱いとの三人が、忙しそうに働いている。(以下、本編は便宜上「暗転」と記してあるが、極力「明転」で処理される)

いと 白秋君。原稿はできた？

白秋 もうちよつと待ってもらえませんか？ いとさん。

俊子 早くしてよ。校了日はもうとっくに過ぎているんだからね。今日中にできなかつたら、ただじゃおかないから。

白秋 俊子さんも、勘弁してくださいよ。もうちよつと、もうちよつとなんです。

いと 勘弁なんてできません。

俊子 最近は部数も落ちているし、印刷屋を怒らせると今月こそつぶれるわ。

白秋 いとさんも俊子さんもきついなあ。二人とも、鉄幹先生に白梅の君(俊子)白藤の君(いと)と謳われた美女とは思えない。

俊子 白梅の君でも会社は守らなくてはね。泣き言は許しません。

いと 白藤の君も同じく。美女を甘く見たら、痛い目見るわよ。

白秋 わが社の女性は強い！

俊子 当然！

いと 現にわが社をまわしているのは、最強の女傑ですもの。

俊子 といとは顔を見合わせて笑う。

白秋 晶子先生に怒られますよ。それはそうと、晶子先生、今も奥で書いているんですか？ 徹夜三日目じゃないですか？

俊子 先生は売れっ子ですからね。他社の締切が三つも四つも重なっちゃったって。

いと 本当、どこにそんな力があるんだか。

白秋 晶子先生は、いまや押しも押されぬ人気作家。四年前の明治三十七年に発表された「君死にたもふことなかれ」。当時、日露戦争下の好戦ムードにあつて、あれだけ力強く、そして美しく反戦を訴えた詩は他に類を見ない程衝撃的だった。

いと あれから一躍、晶子先生は売れっ子作家になったのよね。俊子 考えてみれば、明星の躍進もあれから始まったのよね。明治三十三年に創刊されたわが新詩社の文芸誌「明星」。今年、八周年を迎える明星は、今や日本歌壇を代表する雑誌だもの！

白秋 明治四十一年の今、歌壇は浪漫派の天下です。正岡子規の写実派など蹴散らしてしまえ、ですよ。これも晶子先生の頑張りがあったからこそ！そして今、新詩社を支えるために、いくつも仕事を掛け持ちして、何日も徹夜をしてきている。晶子先生の双肩に新詩社の未来がかかっているといつても過言ではない。いやあ、ありがたや、ありがたや。

奥の部屋に向かって拝む白秋の頭を俊子といとが同時にはたく。

白秋 痛い！

俊子 そう思うなら君もしっかりなさい！
いと 原稿、さっさと書きちゃいなさい。

白秋 僕ばかり責めて、ひどいなあ。鉄幹先生だって、原稿書
いてないじゃないですか。

俊子 鉄幹先生は――。

いと 一応、代表で偉いんだし……。

白秋 今月号も、先生は作品をお書きになりませんよね

俊子 そうなるわね。

白秋 いつもじゃないですか。

いと 今日もまだ社に来てないし、どうせ今日も花街から朝帰
りよ。

俊子 最近の先生は、不調なのよ。書けなくて苦しんでいる様
に見える。

白秋 僕、最近の鉄幹先生の事、心配です。往年の勢いがまっ
たくありません。明星も、晶子先生の実力で、注目を浴びて
はいますが、鉄幹先生がまったく働かなくなって、経営は火
の車。晶子先生が他社で書かれている原稿料でなんとかもつ
てはいますが、このままだと、うちの会社は、危ないんじや
ないですか？

いと めったな事を言うんじゃないの！

その時、奥から、徹夜明けの晶子が出てくる。手には封
筒に入った原稿を持ちフラフラと歩いてくる。

白秋 晶子先生！

晶子 やっと出来た！ いとちゃん、この原稿、未来社さんに
渡して。編集さん午後一番に来るから。

いと 晶子に原稿を渡される。

いと はい！

晶子 それから俊子ちゃん。コーヒーいれて、思いっきり濃い
ヤツ。

俊子 ただいま！

俊子は台所に飛んでいく。

晶子 まだ原稿入れてないのは？

白秋 あっ……。

恐る恐ると言った感じで白秋は手を上げる。そんな白秋

に晶子はニッコリほほ笑む。

晶子 白秋君。わかってるわよね？

白秋 はい！

白秋は急いで机に座り執筆を開始する。そんな白秋を尻目に晶子は原稿チェックをする。

晶子 今月号の表紙は――。

いと (見せて) 地味でしょうか？

晶子 うーん。オーケー。あんまり煽情的だとまたおかみに呼び出しを食っちゃやう。寛さんが、女性の裸を表紙に乗せた時は、爆発的に売れたけど、あとが大変だったし。

いと うちの大将は、世間の注目を集めるようなことはいまいけど、後始末は全然しないし。

白秋 嫌なことは全部僕たちに押し付けて、自分は遊びに行っちゃうし。

晶子 はいはい。校正は君たちに任せるから、印刷所には……。

ああ、人手が足りない！

いと でも、求人に回す資金が我が社には……。

晶子 わかってるわ。私も頑張るから。みんなもよろしくね！

いと&俊子&白秋 はい！

晶子たちはテキパキと働く。

菓子折りを持った女性・山川登美子が玄関に現れる。晶子はそれに気づく。

晶子 登美子さん！

登美子 晶子さん、お久しぶり。あいかわらず、お仕事になると厳しいのね。

晶子 あら、恥ずかしい。見ていたの？ 今日はどうされたの？

登美子 たまたま上京して、用事で近くに寄ったの。晶子さんと先生に久しぶりに会いたくなってきたから来ちゃった。お邪魔だったかしら？

晶子 とんでもないわ。

晶子に菓子折りを渡す登美子。

晶子 まあ、ありがとう。名月堂のカステラじゃない。私大好きなの。

登美子 よかったあ。

晶子 そうだ。明星の編集部員を紹介するわね、北原白秋君、増田俊子さん、中濱いとさん。

登美子 こんにちは。

三人は、会釈する。

晶子 じゃあ、みんなの分、切ってきましたよね。

登美子 あら、晶子さん、私がやるわ。

晶子 登美子さん。お客様なのに悪いわよ。

二人は仲睦まじく、話に花を咲かせつつ台所に去っていく。

白秋たち三人は、申し合せたように、顔をつきあわせる。

白秋 歌人の山川登美子さんですよね？

いと そう。明星に何度も寄稿してもらっているわ。

俊子 あの人は、白百合の君よ。

白秋 鉄幹先生、女を見ると、そんな名前をすっと思いつくんですね。女の人は舞い上がっちゃいますよね。白梅の君と白藤の君。

いと まあ、悪い気はしないわよね。

俊子 晶子先生も、白萩の君だもの。

白秋 鉄幹先生、それを計算せずに言っているところが天才です。天性の女殺しってやつです。

いと そうね。新詩社を作った時の奥さんが、林滝野さんというかた。鉄幹先生は、滝野さんの父親から莫大な設立資金を出してもらったの。その滝野さんは、白芙蓉の君——。俊子 女に「白」と名付けて、自分色に染めたがる。

白秋 うらやましい才能です。しかし、人間としてはどうかと思えます。あれ？ 新詩社を作った時の奥さんは、晶子先生じゃないんですか？

いと 白秋君、知らなかったの？ 晶子先生と鉄幹先生の結婚は略奪婚よ。

白秋 略奪婚！ 晶子先生が強引に？ 鉄幹先生、それだけ惚れさせたんだ。

思わず大声をだした白秋の口をいとと俊子は同時にふさぐ。晶子と登美子はいる台所の方向を見る。晶子がやってくる。三人は緊張する。

晶子 いとちゃん。

いと はい！

晶子 お皿、どこに置いてあったかしら？

いと 奥の棚です。私、持ってきます。

晶子 そう？ 助かるわ。

晶子 といとは奥へ引っ込む。晶子がいなくなつて、俊子と白秋は胸をなで下ろす。

俊子 声が大きいわよ！

白秋 すいません。でも、本当なんですか？

俊子 有名な話よ。

白秋 わが社の設立資金の出どころは、鉄幹先生の前の奥様、白芙蓉の君からだったんですね。

俊子 ところが、その時には、鉄幹先生の心は滝野さんにはなく、当時新詩社に現れた若き才能がかつさらっていった。その名を鳳晶子。後の与謝野晶子。

白秋 ドロドロですね。

俊子 当時は色々言われたそうよ。前妻から金をむしり取つて、若い不倫相手と仲良くやっていたんですね。

白秋 うわあ。大衆好みのスキヤンダル。

俊子 糟糠（そうとう）の妻を、金だけ搾り取つてゴミの様に捨てた。世間様にそう思われてもしょうがないわ。ほぼ事実だし。

白秋 その後、滝野さんと別れた鉄幹先生は、晶子先生と結婚。痛い。痛すぎる。

俊子 話はそれだけじゃないの。鉄幹先生は晶子先生と出会つた同じ時期に、さっきの山川登美子さんとも出会つてるの。

白秋 同じ時期に？ まさか——！

俊子 そのまさかよ！ 二人は鉄幹先生に同時に恋をしたの。

白秋 ドロドロにドロドロが重なつて、ドロドロの二乗ですね。

俊子 君は声が大きいのよ！

白秋 すいません。

俊子 君の言う通り、あの二人は元恋仇。鉄幹先生を巡つて火花をバチバチ散らした仲よ。

白秋 鉄幹先生もてるなあ。前妻を捨て、若い不倫相手二人から取り合いされて。文学者は、これくらい豪快じゃないと大成できないのですね。

俊子 君も頑張んなさい。

白秋は俊子から背中をバシンと叩かれる。

白秋 人知れず頑張っています。後の世の人は、北原白秋といえ、女遊びをしまくった詩人というかもしれませんよ。

俊子 期待しているわ。

白秋 あの二人の恋の鞘当ては、晶子先生の勝利だったんですね。

俊子 そうなるわね。

白秋 二人、仲良さそうじゃないですか？

俊子 二人は無二の親友ですもの。

白秋 親友なんですか？ 女はわからない。

俊子 そう。女はわからないのよ。ああやって表面上は仲が良さそうに見えて、お腹の底では何を考えているのやら。

白秋 脅かさなくてくださいよ。

俊子 女は怖いわよ。

白秋 そう言いつつ楽しそうですね。

俊子 そりゃあもう！ 恋の炎に焼かれる女二人、ドロドロの愛憎劇の果ては一体どんな結末が？ ワクワク！

白秋 俊子さん。楽しみ過ぎです。

俊子 ああ見えて、晶子先生も実は嫉妬深いわよ。

白秋 それは間違いありません。晶子先生の歌集「みだれ髪」。女の情念をあれだけ美しい歌にする方ですから。

俊子 でしょう？ もつれるわよ。

白秋 ですよね。

俊子 愛憎の果てに、鉄幹先生、二人に刺されたりして！

白秋 すごい。ドロドロが鶴屋南北の書いた浄瑠璃のレベルに昇華されています。

俊子 そうでしょう？ そうでしょう？

白秋 僕もすごい作品が書けそうな気がしてきましたよ。

俊子と白秋は盛り上がる。いつの間にか、鉄幹が現れて会話に加わる。その後ろには、鉄幹が連れてきた森鷗外が立っている。

俊子 二人の女の純情をもてあそんだ最低男だもの。最後は悲劇的な方がいいわ。

白秋 二人が刺すのも包丁なんかじゃなくて。

俊子 日本刀もありじゃないかしら？

白秋 日本刀、二本はどうでしょうか？

俊子 宮本武蔵じゃないんだから。

鉄幹 それなら巖流島で刺されるのも乙じゃない

白秋 それはちよっと大衆的過ぎませんか？

三人は、会話に加わっていた鉄幹に気づく。

白秋 鉄幹先生？

俊子 聞いて、いたんですよね？

鉄幹 どうした？ 続けなさい。最低男の死に様。もっと考えようじゃないか。

二人黙ってしまふ。鉄幹は真顔に戻る。

鉄幹 くだらないことくつちやべっていないで、仕事しろ！

白秋 はい！

俊子 ごめんなさい！

鉄幹に怒鳴られ、二人は逃げるように奥へ引っ込む。

その様子を見て鷗外は笑っている

鷗外 与謝野鉄幹君率いる新詩社には逸材がそろっているな。
鉄幹 いや、鷗外先生、お恥ずかしい所を見せてしまいました。

晶子と登美子が入ってくる。

晶子 あなた。お帰りなさいませ。鷗外先生――。

鷗外 やあ、晶子さん。

晶子 今日はどうされたのですか？

鷗外 何、朝帰りの言い訳のために、与謝野君に連れ出されてしまったのだよ。

晶子 まあ！

鉄幹 ちよつと、鷗外先生！

鷗外 はっはっはっ。細君は大切にしないといかんよ、君。

晶子 まったく。鷗外先生にご迷惑をおかけするなんて。

鉄幹 いや、ちがうんだ。昨夜、偶然、先生とお会いして、文学談義に花が咲いてしまつて、こんな時間になつてしまつて……。

鷗外 そうそう、文学談義に花を咲かせたあげくに芸者をあげてドンチャン騒ぎ。

鉄幹 先生！

晶子 あなた！

鷗外 すまん。ちよつとからかいたくなつた。こんなに器量よしの細君がいるんだ。少しくらい怒られた方が、君にはいい薬だ。

晶子 お酒も飲めないくせに、毎晩毎晩、何が楽しいんだか。
鉄幹 いや、それはだね——。おお、白百合の君ではないか！

鉄幹は逃げるように登美子の方に行く。

鉄幹 いや、久しぶりだな。今日は一体……。

登美子 たまたま上京する機会があったものですから。(鷗外を見て)森鷗外先生——。わたくし、山川登美子と申します。

鷗外 あなたが、山川登美子さん——。

登美子 お会いできて光栄です。

鷗外 ああ、あなたがあの「白百合」の——。

登美子 お恥ずかしい——。

鷗外 君の才能は私も大いにかつている。

登美子 わたくしも、先生の作品にはいつも感銘を受けております。

晶子 先生は、新詩社の後ろ盾にもなつてくださっているのよ。ところで、鷗外先生、本当はどういった御用で？

鷗外 本当の用ねえ——。晶子さんは島村抱月という気鋭の演出家を知っているかな？

晶子 島村抱月——。あの有名な。

鷗外 そう。今売り出し中の演出家で、これがなかなか面白い芝居を創るんだ。今夜、観劇の誘いを受けていてね。与謝野君にその事を言ったら、晶子さんのご機嫌取りに、一緒に観劇させてほしいと言いついてね。

鉄幹 どうだ晶子。今夜一緒に逢引きでも。

晶子 あなた。鷗外先生の前ですよ！ それに厚かましいです。

鷗外 私がかまわんよ。なかなか見ごたえがあるそうだから、君たちにもいい刺激になるだろう。

晶子 そうですか。それなら……。

鉄幹 そうだ。せっかくだから白百合の君も一緒に行かないか？

登美子 私は……。

鉄幹 いいだろう？

登美子 ……そうですね。ご一緒させていただいてもいいでしょうか？

鷗外 おお、両手に花とはこの事だ。もてる男はいいねえ。

——暗転

暗闇の中、松井須磨子の歌声が聞こえる。須磨子はノラを演じる。抱月はヘルメル、御園艶子はリンデ、千草桃

代はアンネを演じる。

「人形の家」の大詰めの場である。

オペラ風の演出が施され、歌で芝居が進む。

ノラ ヘルメル。私、明日家を出ます。

ヘルメル ノラ。家も夫も子供も捨てるのか。

リンデ ノラ。そんなことは。

アンネ やめるのよ。

ノラ 私には神聖な仕事がある。

ヘルメル 私の妻であり、母親であるより大事なことか？

ノラ 私は、まず人間よ。あなたと同じくらい。もう、人形ではない。

リンデ 人形の家。心の自由を奪う人形の家。

アンネ 人形の家。女を型にはめる人形の家。

ヘルメル 信仰も捨てるのか？

ノラ もう、神も要りません。私は自分の足で歩きます。

ヘルメル 私への裏切りだ。

ノラ 裏切ったのは、あなた。あなたのためにお金を借りたのに、あなたはかばってくれなかった。

リンデ ヘルメルは妻の名誉を奪った。

アンネ ヘルメルは妻の恥をさらした。

ノラ それがなにより悲しかった。だけど、今日からは自由。指輪を返すわ。あなたも返して。家のカギはここへ置くわ。

アンナ ノラとヘルメルは今日から他人。

リンデ ノラは手紙を書くことも許さない。

ヘルメル ノラ。いってくれ。俺は今日から生まれ変わる。奇跡を起こす。

ノラ 私は奇跡を、もう信じない。

アンナ ヘルメルは、ノラをかばわなかった。

リンデ あの時、奇跡は起こらなかった。

ノラ もう奇跡は起こらない。奇跡は信じない。

ノラ、アンナ、リンデは家を出ていく。

ヘルメル ノラ。行ってしまった。人形の家を捨てて、自由を求めたノラ。私は一人だ。私は孤独だ。私は罪を背負ってしまった。罪深い人生。悔いばかりの人生――。

――暗転。

劇場のロビー。

芝居が終わり、劇場から出てきた観客達の喧噪が聞こえる。そんな中に鉄幹たち四人が出てくる。鉄幹以外の三人は、舞台の出来に満足しているようで楽しそうに話に花を咲かせているが、鉄幹はなぜか不機嫌な様子。

晶子 これが噂に聞くイプセンの「人形の家」ね。新しい女が見事に描かれている。私たち日本の女はまさに人形だったというわけね。

登美子 主人公のノラに素直に感情移入できる晶子さんが羨ましいわ。私は旧家に嫁いで、自分の自由は何一つない人形なのだから。

鷗外 ノラを演じたのは松井須磨子君という。抱月君が見出した、若き才能だよ。抱月君ともどもこれからの日本演劇界をしょって立つ逸材かもしれんね。

登美子 松井須磨子さん。素敵でしたわ。

晶子 あなた？ どうしてそんなに仏頂面なの？

鉄幹 どうもこうもあるかい！ 君たちはあの三文芝居が本当によいと言うのか？

晶子 あなた？

鷗外 私もよく出来た芝居だと思いが。

鉄幹 ああ！ 嘆かわしい！ 鷗外先生までそんな事をおっしゃるのですか？ 女優二人を加えて新演出をやっているが、所詮はノルウエーの作家が書いたもの。借り物で多少の名声は得たとしても、やがてはメッキがはがれるだろう。晶子 そこまで言ったら、誘ってくださった鷗外先生にも失礼ですよ。

楽屋口から演出家の島村抱月が出てくる。

抱月 鷗外先生！

鷗外 おお、抱月君。

鉄幹 なに？ 抱月――。

鷗外 紹介しよう。今回の舞台を演出した島村抱月君だ。

抱月 はじめまして、島村抱月です。

晶子 俳優さんでもあったのですか？

抱月 いや、ヘルメルをやる予定の俳優が病気で降板して、私が急遽代役をやることになったのです。

登美子 演出家の代役演技とは気づきませんでした。

抱月 お恥ずかしい。……おや？ あなたは、与謝野晶子さんではありませんか？

晶子 ええ、そうですか？

抱月 僕はあなたの歌、諳んじるほど読みました。

晶子 まあ、ありがとうございます。

抱月 「みだれ髪」「君死にたもふことなかれ」。あなたの作品には愛が満ち溢れている。ここで会ったのも何かの縁だ。晶子さん、僕にあなたが書いた脚本の演出をさせてください。

晶子 脚本？ 私に、演劇の脚本を？

抱月 是非、執筆をお願いしたい！

晶子 私は舞台の脚本を書いたことはありません。

抱月 舞台の約束事に縛られることはありません。あなたには、人の胸を打つ言葉がある。私はその言葉が欲しいんです。あなたの言葉さえあれば、私はそれを舞台に乗せる自信がある。鉄幹 さすが三文芝居の五流演出家。会ったばかりの人の女房に手をだそうなんて、厚顔もここまで来ると笑えないね。

晶子 あなた！

抱月 おやあなたは……誰ですか？

鉄幹 俺は晶子の夫だ！ 晶子の夫と言えば、俺が誰かくらいすぐわかるだろうが！

抱月 何分、五流演出家なもので、有名な人しか知らないんですよね。

鉄幹 与謝野鉄幹だ！

抱月 聞いたことないなあ。与謝野晶子先生は知っているけれど、明星を立ち上げた新詩社の代表で、晶子先生や山川登美子先生の師匠であり、晶子先生の夫である与謝野寛……（氣付いたふりをして）ああ、あれが鉄幹——。

鉄幹 西洋人の借り物を自分の創作のごとくやって、自己満足しているだけの男に、言われたくはない。

抱月 演劇は総合芸術です。言葉だけの文学とは、その広がり異なる。言葉が音声となり、演技が加わる。さらに音楽と照明が花を添える。それらすべてを考えるのが、演出家だ。十分に私の創作だと思いますがね。

二人は睨み合う。

鷗外 それでは晶子さん。私はそろそろ帰るよ。

晶子 今日は本当にありがとうございます。

登美子 あの、晶子さん？

鷗外 登美子さんもまたいつかどこかで。

登美子 はい……。

帰ってしまう鷗外の背中を見て、登美子はキョトンとなる。

登美子 あのと二人、止めなくていいの？

晶子 いいのよ。あの人、抱月さんに嫉妬しているだけだから。

登美子 嫉妬？

晶子 口では貶しめながら、あの方は抱月さんの作品を認めているわ。抱月さんが作る物は、間違いなくあの方が作りたい物でもある。人がびっくりするほど新しい。鉄幹は、人々が目を覚ますほど、美しく、新しいものを創りたいの。

登美子 美しく、新しい――。

晶子 あの人はいつも美しい物を目指している。世間ではそれを浪漫主義だなんて難しい理屈をつけているけれど。抱月さんに強く当たるのは、同族嫌悪。子供の喧嘩みたいなものだから、放っておいてもいいのよ。

登美子 ……やっぱり、敵わないな。

晶子 えっ？

登美子 晶子さんは鉄幹先生の事をよくわかっている。私では敵わない。

晶子 登美子さん……。

周囲が急に騒がしくなる。どこからか警官の吹く笛の音が聞こえてくる。

登美子 何かしら？

その時、鉄幹と抱月に一人の男、大杉栄が走ってきて、ぶつかる。三人は倒れる。

抱月 痛い！

鉄幹 誰だ？！

大杉 失礼！ ごめんなさいね。

大杉は立ち上がり、困惑する鉄幹たちを尻目に逃げようとする。

だが、笛の音が聞こえて立ち止まる。

大杉 こっちにも張ってやがった！ こっちか。

大杉は、抱月が出てきた楽屋口に気づき、中に入って行ってしまふ。

抱月 そっちは楽屋だ。関係者以外立ち入り禁止だぞ！

大杉はかまわず行ってしまおう。そこに、憲兵服を着た松浦恵が走ってきて、持っていた銃を、鉄幹たちに向ける。

恵 貴様たち、そこを動くな！

鉄幹 なんだ、あんたは？

そこに憲兵隊の隊長。釜ヶ崎利彦が歩いてくる。

釜ヶ崎 憲兵隊隊長。釜ヶ崎だ。

釜ヶ崎の言葉に、恵は休めの体勢になる。

釜ヶ崎 報告。

恵 ハッ！ 現在劇場外周は憲兵隊により、取り囲んでおります。残すは劇場内の搜索のみであります。

釜ヶ崎 ご苦労。この劇場の責任者は誰だ？

抱月 私です。

釜ヶ崎 我々は政治犯、大杉栄を追っている。

鉄幹 政治犯？

釜ヶ崎 大杉がこちらに逃げてきたと報告があった。

晶子 その方が一体何を……。

恵 それはあなた達には関係ない。（晶子を突き飛ばす）

鉄幹 何をする。

釜ヶ崎 陸軍中将のお嬢さまでね、特別な計らいで私の部下になっっている。世間知らずなところがあるから気を付けた方がよい。

釜ヶ崎は恵を下がらせる。

釜ヶ崎 大杉は無許可で演説を行い、大衆を扇動し、国家を転覆しようと画策している。見過ごすことはできない。

釜ヶ崎は忌々しげに劇場を見る。

釜ヶ崎 女の自立を助長する演劇をやっている劇場か。こんなものがはびこるから大杉のような不屈き者が出る。まったく唾棄すべきものだ。

晶子 ここは立派な劇場です。ここで行われる演劇は、多くの人の胸を打ち、人生に潤いを与えます。日露戦争から四年。あの戦争で身体だけでなく心に傷を負った人も大勢います。

芸術は、そんな人たちを癒すためにも必要なのです。

釜ヶ崎 奥さん。あなたは？

晶子 私は、与謝野晶子と申します。

釜ヶ崎 与謝野晶子？ そうか。あなたが……。君、死にたもうことなかれ——。日露戦争に出征した弟さんの無事を祈った歌だな。私の弟はあの戦争で堂々と死んだ。お国のために身を捨てて戦うのが兵士だ。兵士に命を惜しめなどと、そんな弱腰で戦に勝てるか！

晶子 肉親の命を尊いと思う心が、間違っていると仰るのですか？——。

恵 (晶子を突き飛ばす) 口答えは許しません。私の兄も日露戦争で死にました。私は兄の分まで戦わなくてはなりません。

釜ヶ崎 劇場内をくまなく探せ。

恵 ハッ！

釜ヶ崎と恵は去っていく。

鉄幹 おい！ ひよっとしてさっきの男は。

抱月 恐らく、その大杉って男だ。

登美子 どうなさるおつもり？

抱月 匿う義理はないが、劇場内部を調べられてあの男が見つかったら、僕たちは関係者だと疑われる。下手をすれば、上演許可を取り下げられる！

晶子 まあ！

釜ヶ崎と恵が戻ってくる。

恵 大杉はどこにいったのでしょうか？

釜ヶ崎は抱月に近づいていく

釜ヶ崎 改めて、ひとつ聞きたいのだが。

抱月 はい！

釜ヶ崎 怪しい男を見なかったか？

抱月 それは……。

釜ヶ崎は抱月の背後の楽屋口の扉に気づく。

釜ヶ崎 その扉は？

抱月 これは、楽屋に続く扉です。

釜ヶ崎 入らせてもらおう。

楽屋口に行こうとする釜ヶ崎を抱月は止める。

抱月 待ってください！

釜ヶ崎 何だ――。

抱月 この先は、関係者以外立ち入り禁止です。

恵 我らを何と心得る！ 憲兵だぞ。市民が我らの任務を妨害するののか！ そこをどけ！

恵に銃で脅され、抱月は小さくなる。

釜ヶ崎 我らには捜査権がある。中を検めさせてもらう。

釜ヶ崎は抱月を押しつけるが、今度は鉄幹が彼の前に立ちふさがる。

釜ヶ崎 何か？

鉄幹 ここに怪しい男なんて来ていませんよ。

釜ヶ崎 なんだと？

鉄幹 随分前から、私たちはここにいたんだ。なあ。(全員に)

晶子 はい。ここには誰も来ていません。

抱月 あんたたち。

鉄幹 五流演出家の舞台裏など見ても面白くありません。ここには、芸術を愛する俳優が何人もいる。みんな舞台の事で頭がいっぱいだ。そこに、こんな騒ぎが起きては無粋だ。どうか、ここは穏便に。お願いしますよ。

釜ヶ崎 あなたは、この女性の夫、与謝野鉄幹か？

鉄幹 はい！ さすが憲兵隊の隊長殿、どつかのへっぽこ演出家とは目が違う！ いかにも私が与謝野鉄幹です。

釜ヶ崎 才能が枯れ、駄作さえ書けん元文士――。女にたかるしか能のないクズが公務の邪魔をするんじゃない。

鉄幹 なんだと？

釜ヶ崎 聞こえなかったのか？ 女風情の書く駄文に頼って生きる文学者気取りが、我々の邪魔をするんじゃない！

鉄幹 もういつぱん言ってみろ！

鉄幹は釜ヶ崎に殴りかかろうとするが、恵が構える銃に脅されて動きを止める。

晶子 あなた！

釜ヶ崎 これ以上、騒ぎを大きくするなら全員逮捕する。

釜ヶ崎は扉に手をかける。

抱月 待つてください！

しかし、釜ヶ崎が扉を開けるよりも早く、中から扉が開かれて、須磨子が出てくる。須磨子は大きなドレスをつけている。

須磨子 何？ 騒々しいわね。舞台初日で疲れているんだから勘弁してください。

抱月 須磨子！

釜ヶ崎が須磨子に近づく。須磨子はまったく動じない。

須磨子 何よ？ あんた。

釜ヶ崎 だけ、中をあらためさせてもらおう。

須磨子 もう今日の舞台は終わりよ。楽屋泥棒でもする気？

恵 なんだと！ 逮捕されたいのか！

釜ヶ崎 かまうな。行くぞ。

釜ヶ崎と恵は楽屋の中に入っていく。

抱月 須磨子！ あんまり挑発するようなことを言うな！

相手は憲兵だぞ？

須磨子 嫌な男。私を誰だと思っているのよ。

抱月 君はまだ新人女優だ。まったく、怖いもの知らずと言うか……。

須磨子 こういう私だから好きなくせに。

須磨子は抱月に甘えるようによりかかる。

晶子 あの、松井須磨子さんですか？

須磨子 はい。あなたは？

晶子 私、与謝野晶子と申します。今日の舞台、本当に素晴らしかった。

抱月 よかったな、須磨子。与謝野晶子が認めてくれたぞ。

須磨子 与謝野晶子？ 知らない。

抱月 すいません。無知な女で。それよりも、あんた、さつきは何故かばったんだ？

鉄幹 何故と言われてもなあ。俺のような一流は、五流が困っ

ていたら助けてあげないとね。これが一流の一流たる所以だよ。懐が深い。(高笑い)

抱月 なんだと？

晶子 もう、こんな時に喧嘩しないでください！

抱月 まったく。しかし、このままでは、明日から上演できなくなる。どうしよう。

そこに釜ヶ崎と恵が出てくる。

釜ヶ崎 邪魔をした。

抱月 えっ？

恵 中に大杉はいなかった。

釜ヶ崎 君たちの言ったとおりだったということだ。

須磨子以外の全員が狐につままれたような表情をする
歩き去ろうと背中を見せる釜ヶ崎だが、足を止めて睨む
ように晶子を見る。

晶子 何か？

釜ヶ崎 日本はロシアを倒し、これからは強大なる米英と戦を
交えねばならん日が必ず来る。

恵 弱腰な思想を日本に蔓延させるような作品を発表しないで
いただきたい。

釜ヶ崎 あなたのような作品には、社会主義者や無政府主義者
が同じ匂いを嗅ぎ取って群れ集うものだ。今日の舞台しかり
だ。

釜ヶ崎は行ってしまふ。

抱月 どういうことだ？ あの男は、楽屋に入って行ったはず
だぞ？

須磨子 あの男っていうのは、この男？

須磨子が思い切りドレススカートをたくし上げると、そ
こから大杉が出てくる。

大杉 いやあ！ ここは天国ですなあ！

抱月 何やっているんだ、お前は！

大杉 あまり怒らないで！

須磨子 この人、憲兵が入ってきそうになって慌てて私のスカ
ートの中に隠れたのよ。面白いからそのまま隠しちゃった。

抱月 君ねえ！

須磨子 まんまと騙されて。あの憲兵！

晶子 大杉さんでしたかしら？

大杉 初めまして。大杉栄と申します。

晶子 あなた。政治犯として追われているんですね。

大杉 はい。

登美子 もっと真剣になられては如何ですか？

大杉 僕は真剣ですよ。真剣にこの国を変えたい！ この国は今病んでいる！ 政府に言いたいことも言えずに、国民は口をつぐんだままで。このままでは、この国はやがて滅んでしまう。僕はね。未来に生きる子供に、夢を持ってほしいんだ！ しかし既存の方法では、この国の病魔は治せない。だからこそ、僕は社会運動をしているんです！

鉄幹 その為に、女優のスカートの中に入ったか？ 大した社会運動だな。

大杉 言ったでしょ。既存の方法では世界は変わらない！ だからこそ、必要とあれば女性の秘密の隠れ家にごお邪魔しますよ。

鉄幹 すごい屁理屈だな。

大杉 屁理屈——？ アメリカでは、ヒューモアと言いますがね。

鉄幹 晶子、帰ろう。

鉄幹は晶子を連れて帰ろうとする。

大杉 待つてくださいよ、鉄幹先生！

鉄幹 俺の名前を知っているのか？

大杉 御高名な鉄幹先生の事はよく存じておりますよ。

鉄幹 そうか。

鉄幹の目の前で急に正座する大杉。

鉄幹 なんだよ？

大杉 匿ってください！

土下座する大杉。

鉄幹 何言っているんだ？

大杉 行くところがないんです。お願いします！

鉄幹 今日会ったばかりだぞ。

抱月 観念したらどうだい。

鉄幹 ああ？

抱月 一流は懐が深いんだろう？ 一度助けちゃまったんだ。これも何かの縁。この風来坊、匿ってやれよ。

鉄幹 他人事だと思って！ 晶子、何とか言ってみてやれ！

晶子 わかりました。匿いましょう。

鉄幹 何だと――。

晶子 このまま、見捨ててしまうのも夢見が悪いわ。

大杉 奥さん！ 話が分かるなあ！

晶子 ただし！ 無駄飯は食べさせません。

大杉 というと――？

晶子 わが新詩社の業務を朝から晩までみっちり手伝って貰います。

大杉 はい。

晶子 あなた。喜んで。人件費タダで労働力を確保したわ。

鉄幹 そうか。こい。

大杉 ありがとうございます。

――暗転

次の日の朝、新詩社。

白秋、俊子、いとが雑用をしている。

白秋 やばいですよね。大杉栄なんて無政府主義者を引き入れて、新詩社は、絶対に官憲に睨まれますよ。

俊子 でも、仕事をすることだし。

いと 彼がやる仕事より、背負う厄介ごとの方が絶対に大きいわよ。

白秋 大杉って、きつと鉄幹先生を上回る人たらしなんですよ。鉄幹先生が、言いくるめられるところ見たかったですよね。

社屋の前に、二人の女学生風の二人、平塚明、伊藤野枝がやってくる。

明 ここが……あの、与謝野晶子先生のいる新詩社なのね。

明は感動して胸をおさえる。

野枝 明お姉さま。緊張していらつしやるんですか？

明 いいえ、野枝さん。感動しているのよ。これは第一歩なの。

これからの時代、新しい女性の権利を獲得するため、私たちは立ち上がった。与謝野晶子先生のお力をお借りするのは、

その為の第一歩。そう思うと、嬉しさと感動で胸の高まりが抑えられないの。

野枝 お姉さまが嬉しいと、野枝も嬉しいです。

明 けれど、本当にお会いできるかしら。急に不安になってきたわ。それに比べて、野枝さんは泰然となさっているわね。見習わないと。

野枝 明お姉さま。

明 なぁに？ 野枝さん。

野枝 お腹がすきました。

明 まあ、野枝さんったら。

野枝 東京はやはり都会ですね。九州と違っておいしそうなお店がいっぱい！ ご用が終わったら、野枝はあんみつが食べたいです。

明 野枝さん。ここは渋谷といって、それほど栄えている場所ではないの。東京の中心である銀座に行ったら、あなた卒倒するわよ。それはさておき。

明は改めて新詩社を見て、深呼吸する。

明 ごめんください。

白秋 はい、何か――？

そこに、風呂上がりで、腰に手ぬぐいをまいただけの裸の大杉がやってくる。

明と俊子といとは驚く。

大杉 あー、いい湯だった。あら、お客様ですかい？

明 キヤー！！ なんで裸の殿方が？

俊子 ヤダー！

いと なんて格好しているのよアンタ！

大杉 どうかしました？

大杉は意に介さず明たちに近づく。明といと俊子は逃げる。野枝は指をさして、面白そうに笑っている。

明 来ないで！

大杉 逃げないで下さいよ。ご用件は何ですか？

そこに騒ぎを聞きつけた晶子がやってくる。

晶子 何事ですか？

晶子は混乱に巻き込まれる。

そこに荷物を持った紳士然とした男・有島武郎がやってくる。有島は大杉の腕をつかみ一同を見る。

有島 みなさん！ 落ち着いてください。

一同の混乱がようやくおさまる。

大杉 おお！ 君はわが同志、有島君ではないか！

有島 有島君ではないか、ではない！ 何をやっているんだ君は。

大杉 いや、久しぶりにひとつ風呂浴びて気持ちがいいところに、こちらの御嬢さん方がいらっしやって、用件を聞こうとしているんだが、なぜか叫んで逃げるばかりで一向にらちが明かない。

有島 自分の格好を見給え。

大杉 この格好、駄目ですか？

有島 当たり前だ。天下国家のこととはわかるが、女心がわからない。困った男だ。いいから服を着てこい。

有島は大杉を奥へ押しやる。そんな有島に、晶子がおずおずと近寄る。

晶子 あの、あなたは？

有島 これは失礼いたしました。僕は有島武郎。大杉君の、同志です。一応。

晶子 大杉さんの？

有島 大杉君がここにいと聞き、参上いたしました。大杉君に渡してください。着替えなどが入っています。

有島は荷物を晶子に渡す。そして懐から厚い封筒を取り出す。

有島 そして、これは当座の生活資金。大杉君には渡さないでください。あの男が持つと、一晩で酒になってしまふ。

晶子 (封筒の厚みを見て) まあこんなに！ 受け取れませんわ！

有島 そうおっしゃらずに。

有島は晶子に強引に封筒を押し付ける。その時、二人の

手が触れてしまう。

晶子 あつ。

有島 ああ、申し訳ない。

晶子 いえ。

有島は照れて手を引っ込める。晶子も恥ずかしそうにする。

有島 もしや、あなたは与謝野晶子さんではありませんか？

晶子 ええ、そうです。

有島 お会いできて光栄です！

有島は感激して晶子の手をとる。

晶子 あの。

有島 申し訳ない！

有島は急いで手を放す。

有島 感激のあまり我を見失ってしまいました。お恥ずかしい。あなたは、素晴らしい文才の持ち主だ。

晶子 ありがとうございます。

有島 あなたの作品は美しく、かつ力強い生命力に満ちている！ その力の名は愛です。富士山の裾野にあって、その雪解け水をこんこんとたたえる井戸のような枯れることのない愛。与えて、与えて、なおかつ何も求めない。それこそが真の愛だ。私は、初めてあなたの作品を読んだから、それに魅了されているのです。私もいつか、あなたのように愛を歌う文学作品を書いてみたい。

晶子 大げさです。

有島 いえ、大げさなどでは決してない。晶子さん。今、この時代に必要なのは、あなたのような作家だ。僕は大杉君の同志です。この日本という国を変えたい。あなたの愛は、それだけの力があると、僕は確信している。大杉君がこの新詩社に来たことは僥倖だ。晶子さん。あなたも、この国を変えるために、僕たちと一緒に立ち上がって欲しい。お願いします！

情熱的に語り、また晶子の手を握ろうとしてしまう有島だが、すんでのところで気づき止める。

有島 あつ。
晶子 まあ。

有島と晶子は良い雰囲気。
少し離れて見ていた白秋達三人が顔を突き合わせる。

俊子 あの二人、なんかいい感じじゃない？

いと 危険な匂いがするわ。鉄幹先生が、晶子先生のかつての恋敵、白百合の君である登美子さんに接近中の今だけに――。

白秋 白萩の君である晶子さんの心はさみしい。そこへ学習院出身の博愛主義者、有島武郎の登場――。

俊子 もつれますよ。絶対にもつれますよ。(嬉しそう)

白秋 女はああいう情熱的な紳士に弱いからなあ。

明 そういう発言は、女性をバカにしていますわ。

俊子 そうだそうだ。

いと この女の敵！

白秋 いや、そんなつもりは……。ところで、あなた(明)は一体？

明 あ、そうでした！

明は我に返り、晶子たちに近づいていく。

明 晶子先生！ 私たちにご協力をお願いいたします！

晶子は急に声をかけられて驚く。明の方を見る。

晶子 あなた達は？

明 初めまして私、平塚明と申します。

野枝 私は伊藤野枝と申します。

明 私たち、昨年、晶子先生のご講演を拝聴いたしました。感銘を受けました。晶子先生のおふれ出る才能に触れ、女性として生きるために、これまでとは違う新しい女性にならないければならない。そう強く思うようになったのです。先生は、私たちの憧れです。先生！ 私たちと、新しい女性の権利獲得のために立ち上がってはもらえませんか！

晶子 女性の権利？ 私には、そんな大それたことは……。

明 先生の作品には、それをなすだけの力があります！ これからの時代、男の人に頼らなくても生きていける強い女性を目指さないとけません。先生は男に負けない素晴らしい作品を書いているじゃありませんか！ 女が男に一歩も引け

をとらない存在であることを、体現しています。先生、どうか私たちに協力してください！

そこに、服に着替えた大杉が戻ってくる。

大杉 何かと思えば、そんな事のために、若い女がやってきたのかい？

明 あなた、さっきの！

大杉 すいませんね。とんだ姿を見せちゃった。(大笑い)

明 そんな事とは、随分と無礼ではありませんか？

大杉 そう聞こえたのなら失礼。

明 女だからと愚弄しているのですか？

大杉 僕はね、女性を尊敬している。女性は偉大です。女性はもともと素晴らしい存在であるのに、わざわざ肩肘張って、女性は素晴らしいと力説することはありません。

明 私たちのやっていることが徒労と仰いますの？

大杉 そこまでは言っていない。可憐な乙女が、社会運動という不似合いなことで青春を棒に振ることはないと言いたいのですよ。

明 バカにしないでください！

大杉 怒ると、その可愛い顔が台無しですぜ？ 世界を変える運動は、我々男に任せときなさい。晶子先生。さっき有島さんが言った事、考えておいてください。私たちと一緒に、日本を変えませんか？

明 晶子先生も女性でしょう！ 晶子先生は社会運動をしてもよくて、私たちはダメなのですか？

大杉 それはそれ、これはこれ。

明 許せない！ あなたみたいに女性を軽視する人がいるから、この国はいつまで経っても新しい女性が生まれないんだわ！

明は大杉を睨みつけるが、大杉は笑う。

有島 大杉君。麗しき乙女をからかうものではない。

大杉 あんまりこの子(明)がかわいくてね。

有島 それは紳士の行いではないよ。

明 男も女も関係ありません！

明は有島に喰ってかかる。

明 有島さんとおっしゃいましたね。そうやって、男だから、

女だからと、世間を狭めることは、男の傲慢です。晶子先生！
こんな人たちの口車に乗らないでください。どうか、私たち
と一緒に……。

有島 それは困る！ 晶子さんは僕たちと一緒に……。

大杉 おやおや、晶子先生はモテモテだ。

有島&明 うるさい！

大杉 おお、こわ。

大杉は肩をすくめて退散する。

晶子 あの、私は……。

その時、寝起きの鉄幹がやってくる。

鉄幹 まったく！ 何の騒ぎだ！ うるさくって眠れやしな
い！

晶子 あなた。

社内を見回す鉄幹。

鉄幹 知らない顔が随分といるようだが？
いと（見渡して）そうですね……。

白秋 説明すると長くなるんですが、一言でいうと、人が出て
くるたびに、男女関係がもつれていくんです。

俊子 そこかしこ火種だらけ。

そこに有島が、鉄幹の前に歩み寄る。

有島 与謝野鉄幹先生ですね。

鉄幹 いかにも私が鉄幹だが……。

有島 晶子さんを解放してください。

突然の有島の言葉に、その場にいる全員が驚く。

鉄幹 何だ。藪から棒に。

有島 あなたは、晶子さんという稀有な才能の価値をわかって
いるのですか？ あなたが率いる新詩社は、企業としては青
息吐息。すべて社長であるあなたの資金管理がずさんだから
その穴埋めを、妻である晶子さんの原稿料でまかなっている
とか。

白秋 よくご存じで。

白秋はいとと俊子に頭をはたかれる。

有島 あなたは、恥ずかしくないのですか？

鉄幹 恥ずかしい——。何が——。

有島 私は有島武郎。その大杉君と志を同じくするものです。鉄幹 運動家くずれか。あんたには関係ない。

有島 関係はあります。なぜなら、私は、晶子さんの才能を愛しているからです！

晶子は驚き、鉄幹はショックをうける。

有島は鉄幹に詰め寄る。

有島 文学界で、明星を創刊し、浪漫主義をけん引し、与謝野晶子という才能を見出したあなたの慧眼は類を見ないものです。ですが、今現在、あなたはなんら創作活動を行っていない。

鉄幹 うるさい！

有島 このままでは、晶子さんという才能をくすぶらせてしまう。それは文学界、ひいてはこの日本の大損失です。

晶子 有島さん！

有島は晶子の方を向く。

晶子 有島さんが私を過分に評価してくださるのは、嬉しい限りです。ですが、私も夫婦に、あまり立ち入った事を申さねえ。私には、無礼ではありませんか？

有島 申し訳ない。思わず我を失った。ですが、あなたを思えばこそなのです。あなたの才能は、この新詩社だけにおさまるものではない。平塚さんも、そう思えばこそ、今日、晶子さんに会いにきたのですよね？

明 ええ、その通りです。晶子先生の才能は、これからの日本になくってはならないものです。

有島 無礼を承知で言います。晶子さんの才能におんぶに抱っこで、何も生み出そうとしない鉄幹先生に、晶子さんはふさわしくない！

晶子 有島さん。

鉄幹 何を偉そうに。晶子の才能が、俺にはふさわしくないだろ？ 何言ってるやがる！ 俺が目指すのは究極の美だ！

晶子は確かに売れっ子作家になった。だが、それは大衆が、晶子の中にある俗な部分をもてはやしているに過ぎない。大

衆に文学の深淵がわかるはずがない。私は浪漫派の旗を打ち立てた。写真主義、自然主義全盛の時代にあった。文学は、人間を、社会を、自然を、ただ切り取ればいいというものではない。まず、胸を打つものであれといたいのだ。それこそが人を動かす。あんたごときに、何がわかる！

一同は、鉄幹の叫びにしんと静まり返る。

——暗転。

憲兵隊の一室。

憲兵隊長、釜ヶ崎が立っている。そこに恵が報告に走ってくる。

釜ヶ崎 大杉の居所はわかったのか？

恵 申し訳ありません！ いまだに行方が知れず。東京都全域をくまなく搜索しているのですが……。どこかに新しい潜伏先を見つけたのかもしれない。

釜ヶ崎 搜索をつづけろ。

恵 ハッ！

走り去る恵——。

——暗転。

数日後の新詩社。忙しそうに業務にはげむ白秋たち鉄幹門下の三人と、明。大杉も、机に向かっている。

いと 悪いわね。手伝ってもらっちゃって。

明 このままおめおめと帰れません。何としても晶子先生に私たちの運動に参加してもらわなくては！

俊子 でも、晶子先生、人使いがとて荒いでしょう。

明 はつきりいって荒過ぎます。でも、憧れの新詩社で、お仕事を手伝えるのですから。

その時、大きなイビキの音が聞こえる。一同がイビキの発生源を見ると、そこは大杉のデスクである。仕事をしていると思われた大杉は寝ている。明に頭を叩かれて、大杉は起きる。

大杉 何事？！

明 何事じゃありません！

俊子 そうですよ。大杉さん。晶子先生に無駄飯は食べさせないって言われたんでしょう？ しっかり労働をしないと、追っいただきますよ。

大杉 この女性はみんなきついなあ。ねえ？（白秋に同意を求めると）

白秋 まさに。

女性陣は呆れる。そこに、全員分のお茶をお盆に乗せた野枝がやってくる。

野枝 お茶がはいりました。

いと あら、ごめんなさいね。野枝ちゃん。お掃除やお茶くみなんて雑用ばかりさせてしまつて。

野枝 いえ、お姉さまやお兄さまが増えたみたいで、私はとても楽しいです。

一同は野枝からお茶をうけとる。

大杉 いやいや、このお嬢ちゃんだけが癒しだな。

大杉は、野枝の頭を撫でて可愛がる。

明 あまり野枝さんを見くびらないでください。野枝さんはいとも優秀なんです。

いと そうなの？

明 野枝さんは上野高等女学校を、なんと飛び級で合格された才媛なんですよ。

大杉 このお嬢ちゃんが？ とてもそうは見えない。

野枝 ありがとうございます（自慢げ）。

大杉 お嬢ちゃんも、女性の解放運動とやらにご執心なのかい？

野枝 私はあまり難しい事はわかりません。ですが、明お姉さまはご立派だと思います。だから、お姉さまのために私も頑張ろうと思います。

大杉 そうかそうか。でもね。お嬢ちゃん。学校の勉強ができることが、真の意味で頭がいいということではないんだ。学校で教えることには必ず一つの正解がある。その正解を答えたものが優秀ということになる。だが、本当の学問には正解はないんだ。正解のない世界で、より正解に近いものもがきながらさぐる。他人のものさしを当てにせず、自分の頭で

考える。それが真の学問だ。

野枝 自分の頭で？

大杉 だから、君が本当に賢く生きたいのなら、自分で考え、その末に選んだ人生って奴を、いつかは歩まなくてはならない。

明 野枝さんをたぶらかさないでください。

明は野枝を大杉から遠ざける。

大杉 たぶらかすって、そんなつもりじゃ……。

明 あなたのような風来坊が、わかったようなことを言わないでください。

いと 大杉さん、野枝ちゃんを口説いているのかしら。

白秋 主義者っていうのは、女口説くときも理屈っぽいですね。文学の世界じゃあ、ああいうのはもてないんだが。

そこに、鷗外がやってくる。

白秋 鷗外先生。どうされました？

鷗外 与謝野君に会いに来たのだが……。

俊子 ああ、鉄幹先生は……。

顔を見合わせる鉄幹弟子たち。

鷗外 なんだ。まだ帰っていないのか。

俊子 はい。もう三日、みんな心配しているんですけれど……。

白秋 おそらく、白百合の君とよろしくやっついていらっしやいます。

鷗外 与謝野君にも困ったものだな。それでは晶子さんは？

言いよどむ一同。

野枝 晶子先生なら、有島さんと逢引きです。

明たちは慌てて野枝の口をふさぐ。

鷗外 逢引き？ 晶子さんが？

鷗外は笑いだし、一同は、キョトンとなる。

白秋 あの、面白いでしょうか？

鷗外 すまん。不謹慎だったかね。しかし、あの晶子さんが与謝野君以外の男と逢引きだなんて。あれだけ情熱的な作品を書く晶子さんだが、今まで与謝野君以外と色っぽい噂が出ていない。彼女の作品の幅が広がるかもしれないね。楽しみだ。

白秋 そんな無責任な。

鷗外 男女の仲は水物だよ。なるようにしかならん。我々作家は、その心の機微を作品に変えるのが仕事だ。私もいい女といい雰囲気になりたくなっただぞ。

鷗外は笑いながら去っていく。

いと 鷗外先生。凄いな言おうね。

白秋 鉄幹先生が目標にしている文豪だけに、スケールが大きい。

明 野枝さん。逢引きだなんて、大げさに言いすぎです。晶子先生は、有島さんのお誘いで、ちよつと出かけているだけではありませんか。

野枝 すいません……。

白秋 世間一般では、それを逢引きといいます。

明に睨まれて、白秋は小さくなる。

白秋 しかし、鉄幹先生がこれを知ったら……。ああ、頭が痛いな。

俊子 でも、鉄幹先生。最近、社に顔を出さないわよね。一体どこで何をやっているのだから。

明 私は、あの方あまり好きではありません。

言ってから、明はハッと口を押える。

明 すいません。私、でしゃばった事を、お弟子さんたちの前で。

白秋 僕たちだって鉄幹先生に不満がないわけじゃないですよ。

俊子 こら！

いと いえ、白秋君の言う事も一理あるわ。私たちは、鉄幹先生に、才能を見いだされ、この新詩社にやってきた。文学界に革命を起こす文芸誌「明星」をつくる名誉を、誇りに思っているし、先生を尊敬もしている。でも……。最近の先生は、少し変よ。

俊子 そうね。まったく作品を書かないもの。

白秋 先日の有島さんの言いたいことも、わかる気がしますよね。

明 そうなんです！

大きな声で同意する明に弟子たちは驚く。

明 鉄幹先生のこれまでの功績は大です。ですが、今は有島さんの言葉の通り鉄幹先生は、哀れな人です。晶子先生と言う太陽の様に大きな才能に、焼かれて苦しんでいる様に見えませぬ。このまま、晶子先生と一緒にいても、お二人のためにならないのではないのでしょうか？

言葉を発せない一同だが、そんな中で、大杉が笑いだす。

明 何がおかしいのです？

大杉 いや、失敬。晶子先生が太陽だとはよく言ったものだと思います。私には、晶子先生は明星だと思っていました。夜空にひとときわ輝く一等星だと。しかし、鉄幹先生にとつて、晶子さんは太陽か、さすが平塚さんだね。目の付け所が違う。そうだ。鉄幹先生は太陽に焼かれる哀れな小虫だ。

明 すみません。言い過ぎました。

大杉 でもね。太陽は、生命を焼くだけかい？ 太陽は、その温かき、温もりで優しく生命を包む込むこともできる。僕はね平塚さん。そういう温かさこそが、女性の持つ素晴らしさだと思っただけね。

明 女性の持つ素晴らしさ。

大杉 女性のそういう方面にも目を向けてもいいのではありませんか？ しかし、晶子さんが鉄幹先生の太陽なら、晶子さんにとつて、鉄幹先生は、何なんだろうねえ。おっと、いけない。無駄話が過ぎちまった。皆さん！ ほら、締切が近いんだ！ がんばりましょう！

俊子 さっきまで居眠りしていた人が何を言っているの？

一同は作業を再開する。

——— 暗転。

カフェテリア。一人コーヒーを飲んでいる有島。そこに晶子がやってくる。晶子に気づき、立ち上がる有島。

晶子 有島さん。こんな場所に呼び出して、どうされたんです

か？

有島 晶子さんとお会いしたくて。

晶子 いやですわ。からかわないでください。

晶子は笑って、有島の前に座る。

有島 からかったつもりはないんだけどな。ところで、この間の話は、考えていただけましたか？

晶子 この間？ 私に、社会運動に参加してほしいと――。

有島 僕は本気です。

晶子は笑ってしまふ。

有島 何がおかしいんですか？

晶子 だって、うちの社に、似たようなことを言っている女の子がいるんですもの。

有島 平塚さん、でしたか？

晶子 良い機会だから、人手不足解消を兼ねて、うちで働いてもらっています。

有島 たくましい。

晶子 有島さんは、私を買いかぶりすぎです。

有島 そんなことはありません。

晶子 私は、世の中を変えたいとか、政治をよくしたいとか、そんな高尚な志で、作品を書いているわけではありません。私は、ただ切なる思いを、魂の飢えを文章にしているにすぎません。

有島 晶子さんは、何のために作品を作るのですか？

晶子 何のため？

有島 いや、誰のためにと言い換えてもいいかもしれない。あなたの作品の根底には、愛がある。この世にいる「誰か」ために書かれた、燃えるような思い。最初は小さな思いにすぎないが、人を揺さぶり、やがて大きな流れとなる。僕は願わくば、あなたの言葉の源である「誰か」になりたい。

晶子 有島さん――。

有島 いや、これを口にするのは早計でした。ですが、あなたと共に、世界を変えたい。この思いは本物です。

有島は晶子の目をまっすぐに見る。晶子はそんな彼から目を離すことができない。

そんな時、店の中に、抱月と須磨子が入ってくる。抱月は晶子たちを見て、空気を読んで店を出ようとするが、

須磨子は晶子を見つけ近づいていく。

須磨子 晶子さんだ！

晶子 須磨子さん。

有島は慌てて晶子から離れる。

須磨子 何しているの？ こちらは？

有島 はじめまして、有島武郎です。

抱月 こら須磨子。お二人の邪魔をするものではない！ どうも
すいません。世間知らずで。私は島村抱月です。

有島 抱月さん？ いつぞやは、大杉がご迷惑をおかけしたよ
うで。

抱月 あの時――。

須磨子 こちらスカートの中に入ってきた面白い人のお友
達？

有島 あいつはそんな事を……。

須磨子 晶子さんたちは何をやっているの？ 私と抱月さん
はねえ。これから逢引き。

抱月 おい！

抱月は慌てるが須磨子は動じない。

晶子 お二人は、そういう関係だったのですか？ 抱月さんは
――。

須磨子 そう妻子ある身！ でも、私、抱月さんが大好きなん
です。

晶子 須磨子さん。

抱月 須磨子の言う通りです。私も彼女を愛しています。道な
らぬ恋ですがね。

抱月と須磨子は見つめあう。

抱月 それはそうと、晶子先生。脚本の方はどうなっています
か？

晶子 舞台用の脚本ですね。執筆中です。

有島 晶子さん、抱月さんの舞台の脚本を執筆されているんで
すか？

抱月 私も出来上がりが楽しみです。

有島 私、絶対に見ます！ 楽しみだなあ！

須磨子 有島さんも、晶子さんの事が大好きなのねえ。

有島 いや、その——。はい。

須磨子 ひよっとして、逢引きの途中だった？ 晶子さん、且

那さんがいるのに？

晶子 ちがいます！

抱月 須磨子！

須磨子 でも、鉄幹先生も女の人と一緒にいたからおあいこよ
ね。

晶子 今なんと？

須磨子 あら、(抱月に)これ、言っちゃダメだった？

抱月 須磨子。

須磨子 この間、女性と親密そうにしていらつしやるところを

お見かけたの。舞台にもいらした方で、確か、名前はそう、

山川登美子さんってお名前だったかしら。

——暗転。

町中。雑踏。

鉄幹は誰かを待っている。そこに登美子がやってくる。

登美子 お待たせしました。鉄幹先生。

鉄幹 今日はどこに行こうか。歌舞伎座は昨日行つたし、その
前は浅草。そうだ。青山に美味い洋食屋があるんだ。

登美子 こうして、色々な所に連れて行ってもらえるのは楽し
いのですが、いいんですか？

鉄幹 何がだい？

登美子 お仕事、たまっているのでは？

鉄幹 いいよ。僕がいなくても、会社はまわる。

登美子 でも、晶子さんが心配しています。

鉄幹 晶子の事はいい！

鉄幹の大きい声に驚く登美子。

鉄幹 すまない。驚かせてしまったね。

登美子 いえ。

鉄幹 情けない男と思わないでくれ。

登美子 そんな、私は。

鉄幹 僕が書けなくなっているのは、君も知っているだろう？

登美子 はい。

鉄幹 ——晶子なんだよ。

登美子 えっ——。

鉄幹 僕が書けなくなった原因は、晶子なんだ。弟子たちも、

うすうすは気づいている。

登美子 どうして、晶子さんが、先生の不調の原因なのですか？

鉄幹 僕はね、登美子さん、晶子の才能を愛している。彼女に初めて会った瞬間に。この素晴らしい才能を、世に知らしめたいと思った。赤字続きの明星を続けているのは、その一心だ。彼女の才能を思う存分に発揮できる場を作りたい。そのために無茶もした。そして、彼女の才能に対する気持ちが愛に変わるのに、時間はかからなかった。

登美子 私も晶子さんのようになりたかった。でも、私の実家は古い家柄。両親の勧める見合い結婚をするよりほかはありませんでした。

鉄幹 晶子の愛は強い。強烈だ。その強い愛で、絞め付けられると、息ができなくなるほどだ。彼女の愛は与えても、与えても、微塵も擦り減らない。ふと、思うことがあるんだ。晶子の才能を見出し、世に認めさせたのは僕だ。だが、僕には一体何がある？ そんな思いが、己の中に生まれた時、気づいてしまったんだよ。

登美子 気づいた？

鉄幹 晶子に嫉妬している自分自身にだ。彼女ほどの言葉は僕からは生まれない。僕はまったく書けなくなった。

登美子 鉄幹先生……。

鉄幹 有島といったかな。彼もまた、僕と同じく晶子の才能に惚れた男だった。彼に言われたよ。晶子を解放しろと……。本当に、その通りなのかもしれない。

登美子 そんなこと、ありません！

鉄幹 登美子さん？

登美子 その、有島という人が何と言おうと、晶子さんの事を一番理解しているのは、鉄幹先生です！ 弱気にならないでください。

登美子の言葉に鉄幹は、ほほ笑む。

鉄幹 ありがとう。だが、今日を楽しもう。

登美子 ……はい。

鉄幹 今日はどこに泊まるんだい？

その時、登美子が急に咳き込みだす。

鉄幹 登美子さん？

登美子の咳は次第に大きくなる。そして苦しみだす登美子。

鉄幹 登美子さん！

倒れる登美子。そんな彼女を支える鉄幹。

——暗転。

憲兵隊の一室。

釜ヶ崎の前に恵が立っている。

釜ヶ崎 何故、大杉が捕まらん。

恵 友人、知人をたどってみても、ぶつとりと連絡が途絶えています。足取りが掴めません。

釜ヶ崎 一体何故——待てよ？ 大杉はあの日、劇場にいた。ということは、島村抱月、与謝野鉄幹の周辺にいるはずだ。抱月、鉄幹の周辺を洗え。

恵 ハッ！

——暗転。

病院の待合室。

鉄幹がベンチに座っている。そこに登美子がフラつきながらやってくる。

鉄幹 登美子さん、君はこの病院に入院しなくてはならない。

登美子 いやです。せつかくの先生とのお出かけですのに。

鉄幹 駄目だ。今日は自分の身体を大切にしなさい。

登美子の動きが止まる。

登美子 お医者様から。聞かれたのですね？

鉄幹 結核だそうだね。定期的に東京まで来ていたのは、通院のためだったのだね。

登美子 私、もう長くないようです。

鉄幹 なぜ黙っていた？

登美子 先生の悲しい顔を見たくなかったから。

鉄幹 登美子さん。

登美子 でも、ダメですね。バレてしまいました。

鉄幹 なにか、僕にできる事はないだろうか？

登美子 鉄幹先生。

二人は見つめあう。その時、晶子が息を切らせて入ってくる。

晶子 登美子さん！ 倒れたんですって……。

鉄幹がいる事に気づき、晶子は驚く。

晶子 あなた。

鉄幹 晶子。

晶子は、黙って待合室から立ち去ろうとする。

鉄幹 晶子！

登美子 待って！

登美子は鉄幹の手をつかむ。鉄幹は登美子を見る。登美子はハツとしてその手を離す。

鉄幹 登美子さん……。

登美子 すいません……。でも、もうダメです。

登美子は鉄幹に抱き付く。

登美子 初めてお会いした時から、ずっと、先生の事をお慕いしていました。ずっと、胸に秘めているつもりでした。でも、もうダメです。鉄幹先生。お願いです。私が、死ぬまでいい。私のそばを、離れないで。

晶子はその場に泣き崩れる。

鉄幹は、彼女を抱きしめ返す。

——暗転

新詩社。弟子たち、大杉、明が作業をしている。そこに傷心の晶子が帰ってくる。

俊子 先生。お帰りなさい。登美子さん、大丈夫ですか？
晶子 ええ。

晶子は力なく答える。

白秋 先生。来月号の事なんですが……。

晶子に近づこうとする白秋をいとが止める。

いと 空気を読みなさい。

白秋 はい。

そこに、野枝が会社の中に飛び込んでくる。

野枝 大変！ 憲兵がこっちに来ます！

大杉 なんだって！？

俊子 大杉さん！ 奥に隠れて！

押されるように、大杉は会社の奥に行く。

同時に釜ヶ崎と銃を構えた恵が新詩社の中に入ってくる。

俊子 なんですか？！ 何か御用ですか？

釜ヶ崎 話は後だ。中を検めさせてもらう。

晶子 お待ちください！ 無礼ではありませんか！

釜ヶ崎 また会いましたな。

晶子 あなたは……劇場でお会いした。

釜ヶ崎 釜ヶ崎です。ここに、政治犯大杉栄が潜伏していると
いう情報をつかみましてね。

晶子 わが社に、そのような者はおりません。お帰りください。

釜ヶ崎 隠し立てすると、後悔しますよ？

釜ヶ崎は晶子を睨むが、晶子は一步も引かない。

釜ヶ崎 まあいい。中を調べれば済むことだ。おい。

恵 はっ！

恵が中に入ろうとするが、野枝がその前に立ちふさがる。

野枝 ダメ！

恵 どけ！

野枝は恵に押され、倒れる。

野枝 キヤッ！

明 野枝さん！ 何をするんです！

恵 うるさい！

そこに鷗外がやってくる。

鷗外 静まりたまえ！

鷗外の大声に、一同の動きはピタリと止まる。

鷗外 一体何事だね？

釜ヶ崎 あなたは森鷗外、いや、森林太郎閣下……。

鷗外 憲兵隊か、職務に忠実なのは結構だが、少し手荒なようだ。女子供を傷つける事を、一体いつから我が国の軍部は良しとした？

釜ヶ崎 しかし、我らは……。

鷗外 私が、軍医として中将相当の陸軍軍医総監に任命されたのは、君も知っているはずだ。君の行いを、上層部に届けるぞ。

釜ヶ崎 (敬礼をして) 失礼します……。

歯噛みをする釜ヶ崎。恵を見る。

釜ヶ崎 今日の所は帰るぞ。

恵 ハッ！

恵は出ていく。

釜ヶ崎は晶子を睨む。

釜ヶ崎 このままで済むと思うな。

晶子 待って。

背を向ける釜ヶ崎を晶子は呼び止める。

晶子 あなたは、私に恨みを抱いている様に見えます。なぜです？

釜ヶ崎 言ったはずだ。日露戦争時にあなたが発表した歌「君死にたまふことなかれ」。あれは当時我が国に反戦の気運を生んだ。

俊子 日露戦争はもう終わったことです。

釜ヶ崎 終わってなんかいない。あの歌が、歴史に残り続ける

限り。

それだけ言って、釜ヶ崎は新詩社を後にする。
鷗外はショックを受ける晶子に近づく。

鷗外 私が来てよかった。
晶子 ありがとうございます。

そこに大杉が戻ってきて、怪我の治療をしている野枝のもとに駆け寄る。

大杉 大丈夫か？ お嬢ちゃん。
野枝 はい。

大杉は晶子に頭を下げる。

大杉 晶子先生。申し訳ない。
晶子 大杉さん。

大杉 こんなことになるとは。晶子先生が目をつけられてしまった。私は一刻も早く出ていきます。

鷗外 まったく。こんな一大事に、与謝野君はどこにいるんだ？

——暗転。

夜、病院の一室(ベッドは舞台外にある設定)、鉄幹は机で書き物をしている。だが、上手くいかず、書いては原稿を丸めて捨てを繰り返している。その背後に寝間着姿の登美子が近づいてくる。

登美子 何を書いていらつしやるんですの？

鉄幹 ダメじゃないか。寝ていないと。

登美子 鉄幹先生がそばにいてくれるだけで、私、いつもより調子がいいんですよ。

鉄幹 僕はここにいるから、何か欲しいものがあれば、すぐに言うんだよ。

登美子 何もありません。私、幸せです。

鉄幹 そうか。

鉄幹は書き物をつづける。そんな彼の姿を幸せそうに見続ける登美子。すると、そこにノックの音がする。

鉄幹 誰だ？ こんな夜更けに。登美子さんはベッドに戻っていなさい。

鉄幹はベッドのある舞台外に登美子を優しく押しやり、扉の方に行く。扉を開ける前に釜ヶ崎が入ってくる。

鉄幹 あなたは、憲兵隊の隊長？

釜ヶ崎 どうも、鉄幹先生。

鉄幹 こんな夜更けに何をしに来た？

釜ヶ崎 お見舞いですよ。山川登美子さんが入院したと聞いてね。

鉄幹 非常識だ。登美子さんは弱っている。あなたは刺激が強すぎる。帰ってくれ。

釜ヶ崎 鉄幹先生。あなたの会社、新詩社に大杉が潜伏していることがわかった。

鉄幹 貴様。

釜ヶ崎 今から大杉を逃がしても無駄だ。一度は、大杉を匿った。これは犯罪だ。鉄幹先生。私はあなたも、あなたの奥さんも投獄することができる。

鉄幹は釜ヶ崎を睨みつける。

釜ヶ崎 それでは、失礼する。

釜ヶ崎は一礼して去っていく。鉄幹は釜ヶ崎が行った方向をジッと睨む。

舞台袖、登美子が出てきて、鉄幹の背中を心配そうに見やる。

———
暗転。

新詩社。大杉が荷造りをしている。

いと、俊子はそれを見ている。

いと 本当に出て行ってしまふの？

俊子 まだ、憲兵が大勢あなたを探しているわよ？

大杉 これ以上、皆さんに迷惑はかけられない。

大杉は荷物を背負って出ていこうとする。その前に、明と野枝が現れる。

野枝 大杉さん。いなくなっちゃうんですか？

大杉 ああ、ここにいたら迷惑かけちゃうからね。

明 どこに行かれるおつもりで？

大杉 次の潜伏場所はまだ決まっています。まあ、なんとかなるでしょう。

大杉は笑うが、やがて、明の顔を凝視する。

明 なんですか？

大杉 いや、初めて会った時から思っていました。平塚さんって何かに似ているなって。

明 何か？

大杉 その目力――。

明 何ですって！

大杉は手を打つ。

大杉 ああ！ そうだ。思いだした。あなたは、あの鳥に似ているんだ。

明 鳥？

大杉 昔、長野の山奥に行った時に見たんです。極寒の雪の中、それでも温かい春が来ることを信じて、自然と戦う気高く美しい鳥を、一目見た時からあなたの中に、僕はその鳥の気高さを見ていました。平塚さん。あなたが目指す物が、僕にはよくわからない。しかし、信念と覚悟は本物だ。――だが、あの鳥、なんていったかなあ。

明 ……最後までいい加減ですね。

大杉 じゃあ。お嬢ちゃんも、いつか！

野枝 はい！

そう言って、大杉は走って行ってしまふ。

野枝 お姉さま。よかったですか？

明 何がですか？

野枝 お姉さまはご自宅に大杉さんを匿おうと思っていらっしゃったんじゃないんですか？

明 そんなこと。

野枝 お姉さまは、大杉さんの事が好きなんです。

慌てる明に野枝は笑いかける。

野枝 私も、大杉さんが大好きです。
明 まったくこの子は。(笑う)

そこに、白秋が帰ってくる。

俊子 白秋君！

いと どうだった？

白秋は力なく首を横に振る。

白秋 ダメだった。どこの印刷会社も、新詩社との取引を断つてきました。

俊子 どうして急に。

いと こんな事、初めてじゃない！

そこに晶子が帰ってくる。

いと 晶子先生！ 大変です！

晶子 知っているわ。私も、今まで執筆していた出版社全部に、連載を中止してほしいと。

白秋 そんな。晶子先生の仕事までなくなるなんて。

晶子 新詩社によくない噂が立っているようなの。

俊子 よくない噂？

晶子 多分、圧力がかかっているのよ。

いと 圧力？ 憲兵隊の隊長ですよ！ あいつが新詩社に圧力をかけているんだ！

俊子 そんな！ 大杉さんを匿ってはいたけれど、そんな事で？

白秋 理由なんてなんでもいいんです。あの男は、晶子先生を恨んでいた。

重い沈黙がその場を包む。

明 差し出がましいようですが、晶子先生がいったん新詩社を離れるというのはどうでしょうか？

白秋 なんだって？

明 疑いをかけられているのは新詩社です。あの憲兵隊長が、晶子先生に私怨があっても、晶子先生ご本人には何もできないはずですよ。ですから、ここはいったん、ほとぼりが冷めるまで、晶子先生は新詩社を離れ、個人で活動されては？

晶子 ダメよ。今、新詩社の活動を止めれば、明星を発行することができなくなる。それはダメ。

白秋 なぜ、そこまで、明星にこだわるんです？

晶子 それは……明星は、鉄幹との絆だから……。

白秋 絆——？

晶子 とにかく、みんな一致団結して、この危機を乗り切りましょう！

鉄幹(声) その必要はない。

鉄幹が現れる。

いと 鉄幹先生！

晶子 あなた！

鉄幹 明星は、今日をもって廃刊とする。

愕然とする一同。

白秋 廃刊？

俊子 本気で言っているんですか？ 鉄幹先生！

鉄幹 本気だよ。このままではジリ貧だ。ならいっそのこと、全部なくしてしまおう。もともと、大した雑誌じゃないんだ。おかみに目をつけられてまでやる事じゃない。

いと これまでだって、批判や規制はあつたじゃないですか！それでも、私たちは。

鉄幹 ならば正直に言ってる。飽きたんだよ。

白秋 この雑誌は、先生が文学界に新風を起こすために立ち上げた雑誌です。僕は、その理念に惹かれて、先生の門下になりました。

鉄幹 立ち上げたのが俺なら、たたむのも俺の勝手だ。

白秋 先生が、そこまで勝手を言われるのでしたら、もう先生についていくことはできません。先生の元を離れさせていただきます。

晶子 白秋君！

いと 私も、最近の先生にはついていけません。

晶子 いとちゃん。

俊子 私も、先生に愛想が尽きました。明星を廃刊するのでしたらご自由に。

晶子 俊子ちゃん。

鉄幹 なんだ？ 出ていくのか？

白秋 いままで、お世話になりました。晶子先生も。

白秋たちは晶子に頭を下げて新詩社を出ていく。明たちは、なすすべなく立っている。

晶子 一体なぜ？

鉄幹 お前も、出て行っていいんだぞ。

晶子 明星は、私とあなたの、絆だったのではないのですか？
この雑誌は、私のためにあなたが……。

鉄幹 お前はお前の自由にするといい。

そう言って、鉄幹は出ていく。

晶子 どうして……。

晶子はその場に崩れ落ちる。

——暗転。

登美子の病室。

鉄幹と鷗外が向かい合って座っている。

鷗外 明星は廃刊だそうだな。

鉄幹 ええ。

鷗外 本当に良かったのかね？

鉄幹 もう無理です。大杉君の一件で、新詩社は政府に目を付けられてしまいました。あの釜ヶ崎という憲兵隊長が、晶子の周辺にも圧力をかけています。

鷗外 あの男にも困ったものだな。

鉄幹 晶子の才能は、新詩社でくすぶるものではありません。

鷗外 君と晶子さんは縁がなかったということか。弟子たちに、嫌われてしまったそうだな。

鉄幹 自業自得です。

鷗外 与謝野君。この間言っていたバリ留学の件、考えてくれたかね？

鉄幹 もちろんです。

鷗外 バリで文学について一から勉強しなおすすめのも今の君にはいいのではないかね？ 旅費は心配するな。国費留学だ。鉄幹 先生が国に打診してくださいね。感謝いたします。

鷗外 礼には及ばんよ。それで、どうだろう？

鉄幹 私に留学帰りのハクがつけば、大学を出ていない山師というあだ名が消えてくれるかもしれませんね。

鷗外 そういうことではない。今、君は底なしの不振に陥っている。そういう時は無理をしてはいけない。私も若いころ、文学に打ち込み、軍の上層部に睨まれた。おかげで、九州の小倉に三年も左遷されたんだ。当時は、冷や飯を食わされたと思つたが、今から思うとあの三年間が、私の文学のよい滋養になつている。留学に出れば、君にも同じように文学的な蓄えができるのではないかと思うんだ。

鉄幹 鷗外先生。せっかくですが、今は……。

鉄幹は登美子がいるベッドの方向(舞台袖)を見る。

鷗外 登美子さんを放つては行けないか……。

鷗外は立ち上がる。

鷗外 登美子さんにお大事にと伝えてくれ。

鷗外は病室を後にする。

鷗外が外に出てしばらくして、咳をしながら登美子がやってくる。

鉄幹 登美子さん。ベッドから出てはダメだよ。

登美子 今、鷗外先生がいらつしやつていたんですね。何もお構いできず、失礼をしてしまいました。

鉄幹 君が心配することじゃない。

登美子 留学の事、初めて知りました。

鉄幹 晶子にも言っていないことだ。そうだ果物でも買って来ようか。

鉄幹は病室を出ていく。登美子は一人病室に残される。

登美子 私は、何をしているのだろうか？ あの人の事を愛しているのに、やっている事はあの人の重荷になることばかり。ダメだわ。いやな事ばかり考えてしまう。今は、あの人と一緒にいられる幸せを噛み締めていればいいの。

登美子はベッドに帰ろうとして、ゴミ箱を倒してしまう。鉄幹の書き損じが床に散らばってしまう。登美子は散らばった原稿を拾い集める。ふと、その一枚を開いて見てみる。そして登美子は驚く。

登美子 これは――。

登美子は書き損じを、何枚も何枚も読む。その内に、涙が溢れてくる。

――暗転。

新詩社。誰もいなくなり、閑散とした室内。

そんな寂しい場所に晶子が佇んでいる。

晶子 何もかも、なくなってしまった。

そこに有島が入ってくる。

有島 聞きました。明星が廃刊になったと。

晶子 そうですか。

有島 新詩社は、どうされるのですか？

晶子 わかりません。弟子たちも、みんな離れてしまいましたから……。

有島 僕と大杉君が、すべての種を蒔いたことになりませぬ。

晶子 大杉さんは、単なるキツカケに過ぎませぬ。鉄幹の気持

ちが、私から離れてしまっていたことがすべてです。

有島 晶子さん。

晶子 私だけでした。あの人が、私を変わず愛してくれていると思っていたのは。明星、私たちにとつてのかけがえのない絆であると思っていたのは、全て、失ってしまった。

晶子は涙を流す。そんな晶子に有島は背中から抱き付く。

晶子 有島さん！

有島 晶子さん。このままでいい。聞いてください。

晶子 いけません！ 離れて。

有島 晶子さん。僕と結婚してください！

晶子 え。

有島 最初は憧れでした。あなたの作品に、才能に憧れていただけでした。しかし、私の気持ちは既に愛です。晶子さん。どうか、僕の思いに応えてください。

晶子 有島さん。

白秋(声) 晶子先生！

晶子と有島は外からの声に慌てて離れる。白秋、いと、

俊子の三人が社内になだれ込んでくる。

晶子 あなた達。どうしたの。

俊子 山川登美子さんが、亡くなられました！

晶子 登美子さんが――。

晶子は茫然となる。

――暗転。

机が一つだけの閑散とした室内。そこに晶子が入ってくる。

晶子 ここで、登美子さんが。

晶子は机に両手をついて泣き出す。

晶子 登美子さん。

晶子は何かに気づいて、机の引き出しを開ける。そこに大きめの封筒があり、晶子はそれを取り出す。中から、便せんが――。

晶子 (読む) 与謝野晶子様へ――。

晶子が封筒を開けようとした時、扉が開き。バケツと雑巾を持った鉄幹が入ってくる。晶子は思わず封筒を隠す(自分のカバンに入れる)。

晶子 あなた。

鉄幹 晶子か。

晶子 気まずい二人。鉄幹は気まずさを紛らわすように掃除を始める。

晶子 掃除ですか？

鉄幹 ああ。登美子の最期を看取ったのは俺だ。最後までしっかり責務を果たさないとな。

晶子 手伝います。

鉄幹 いいよ。これは、俺の仕事だ。

晶子 登美子さんと、ずっと一緒にいたそうですね。

鉄幹 ああ。

晶子は鉄幹から雑巾を奪おうとする。

晶子 やっぱり手伝います！
鉄幹 やめろ！

晶子から強引に雑巾を奪い返す鉄幹。

晶子 いいですね。登美子さんは。

鉄幹 そんな言い方があるか。登美子は死んだんだ。

晶子 少なくとも、あなたに愛されている。私とちがって！
鉄幹 なにを。

晶子 あなたは、私の事なんてどうでもいいのでしょうか？
うでもいいから、明星を簡単に廃刊してしまった。私の思い
なんてこれっぽちも考えずに！

鉄幹 そんなことがあるか。

晶子 もういいです。あなたの好きなようになさればいい。

鉄幹 いい加減にしないか！

晶子 私、有島さんに求婚されました！

鉄幹 お前、それを受けたのか？

晶子 さあ、どうぞでしょう。

鉄幹 お前！

晶子 自由にしろと言ったのはあなたではありませんか！

鉄幹 勝手にしろ。

晶子 ええ！ 勝手にさせていただきます！

晶子は走るようにその場を去っていく。

鉄幹は怒ったように雑巾を床に投げ捨てる。

鉄幹 クソッ！

——暗転

街中。大杉が夜の闇の中を、逃げるように歩いている。

大杉 はあ。疲れた。逃亡生活も楽じゃないよ。新詩社の風呂
が懐かしい。

そこに釜ヶ崎と恵がやって来て、大杉は慌てて物陰に隠
れる。

釜ヶ崎 劇場主との話をついたのか？ 上演中止の。

恵 いえ。無理でした。

釜ヶ崎 そうか。仕方がない。明日、大杉の搜索を劇場で決行する。無政府主義者・大杉栄の搜索なら劇場も逆らえない。恵 難しいのではありませんか。大杉が劇場にいる根拠が希薄です。

釜ヶ崎 根拠などいらない。与謝野晶子が書いた演劇をつぶすのだ。

恵 ——わかりました。明日、演劇の開演時間に合わせて、大杉の搜索を開始します。

物陰から大杉が震えながら出てくる。

大杉 なんてこった。あの憲兵、俺のために芝居を一つぶっ潰すだと。

大杉は駆け出す。

——暗転。

新詩社。晶子は抱月と話している。

抱月 最高の脚本です。「明星」という題もいい。あなたが全身全霊で書かれたことが、ひしひしと伝わってくる。

晶子 抱月さんが、私の作品をどう料理してくれるのか、今から楽しみです。

抱月 期待しててください。私は舞台稽古があるので行きま

す。それでは。

抱月は去る。

一人たたずむ晶子。そこに有島が入ってくる。

晶子 有島さん。

有島 そこで、抱月さんとすれ違いましたよ。明日の舞台。本当に楽しみだ。

晶子 ええ。

有島 僕も、見に行かせていただきます。そこで、この間の返事が欲しい。

晶子 えっ？

有島 僕は本気です。

有島はそう言って出ていく。晶子は一人残される。

晶子は机に足を当て、その上に乗っていた自分のカバンを床に落とす。カバンから、登美子の病室で見つけた封筒が出てくる。

封筒を拾い、中身を出す晶子。封筒の中には便箋が入っている。

登美子(声) 晶子さんへ。これをあなたが呼んでいる時、もう、私はいないでしょう。

晶子は食い入るように遺書を読む。

登美子(声) 最初に謝っておきます。いくら謝っても許される事ではないのかもしれないけれど。私は、鉄幹先生を愛していました。

晶子 登美子さん。

登美子(声) あの人の純真さ。子供の様にただ自分の欲するものを求める素直な所に、初めてお会いした時から惹かれていました。でも、鉄幹先生が選んだのは私ではありませんでした。それは晶子さん。あなたでした。一時は嫉妬の炎に焼かれました。ですが、そんな私の嫉妬心を砕いたのもまたあなたでした。あなたは、いつも私に笑いかけてくれた。親友として、私を慈しんでくれた。あなたの慈愛に、私は癒されました。あなたは私の恩人です。それからは、鉄幹先生を挟んで、私は戦友を得た気持ちになりました。同じ敵に向かって一緒に命を賭けている感覚——。楽しかった。私の人生に青春と言うものがあるのなら、それは、晶子さん、鉄幹先生と過ごした日々です。ですが、そんな日々も長くは続かなかつた。今病魔におかされ、私は、自分の命がもう長くない事を知り、心を決めました。鉄幹先生に思いを告げる。死ぬのだから、これくらいは許される。——私は無二の親友であるあなたを傷つけてしまった。もう、後悔しても遅いですね。でも、私は、思いを止める事はできなかつた。私はとても醜い。

晶子 登美子さん。

晶子は涙を流す。

晶子 あなたは、醜くなんかない。

登美子(声) 残念ながら、私の行いは、結局は私を空しくするだけでした。同封した鉄幹先生の原稿を読んで、私が入り込

む隙など微塵もなかった事を思い知らされました。

晶子は封筒から原稿の束を出す。

晶子 あの人のお原稿？

もう一度、手紙に目を戻す晶子。

登美子(声) 鉄幹先生の書き損じです。

晶子は原稿を読む。(晶子が一枚めくることに鉄幹の声)

鉄幹(声) 何度試しても、書けない。晶子なら、この素材で読者の胸を打つ作品を書き上げるだろう。「やわ肌の熱き血潮に触れもみで寂しからずや道を説く君」——。言葉に一片の無駄もない。晶子の魂は枯れることのない泉だ。病室の窓から、萩が見える。晶子と初めて出会った時も萩が咲いていた。

晶子 私の事ばかり……。

再び、手紙に目を落とす晶子。

登美子(声) 鉄幹先生は、晶子さんの事ばかり私のそばにいるのに。

晶子 登美子さん——。

晶子は涙ぐみクスリと笑う。

登美子(声) 明星を廃刊にしたのは、晶子さんを守るためです。晶子さん。私の最期の願いです。鉄幹先生と一緒にいてください。いつまでも支えてください。鉄幹先生が精神の奥深い、人間の業の部分で愛しているのは晶子さんです。晶子さん、私とお友達でいてくれてありがとうございます。そして、さようなら。

山川登美子。

晶子 登美子さん。

晶子は原稿に顔をうずめ泣く。

——暗転。

路上。昼下がり。一升瓶を抱えた鉄幹が千鳥足で歩いて

来る。

鉄幹 俺はもう駄目だ。生きるかいもない人間だ。後先考えない。その時だけの気持ちで動いてしまう。後に残るのは、後悔と自己嫌悪だ！

抱月がやってきて、鉄幹を見つける。

抱月 おい、何やってんだ、アンタ。

鉄幹 うるせえ！ 酒もってこい！ 冷やでもってこい！

抱月 冷やね。いいだろう。

抱月は舞台袖に引っ込んでバケツにくんだ水を持ってくる。そしてそれを鉄幹の頭にかける。

鉄幹 なにしゃがる！

抱月 お望み通りのお冷だ。少しは頭も冷えたかい？

鉄幹 お前、五流演出家。

抱月 情けないなあ。六流作家。

鉄幹 うるせえ！

抱月 今日は、晶子先生が書いた芝居の初日だぞ。見に来い。

鉄幹 随分な自信じゃないか。

抱月 見ろ。

抱月は鉄幹に芝居の脚本を渡す。

鉄幹 これは？……

抱月 晶子先生渾身の脚本だ。

鉄幹は無言で抱月に脚本を突き返し、立ち上がり去ろうとする。

抱月 いつまで逃げているんだ！

鉄幹 なんだと？

抱月 晶子さんが、待っているぞ。

鉄幹 晶子は関係ない！

抱月 関係ないだと！ あんたは、晶子先生の深い思いに応える力のない哀れな抜け殻だ。

鉄幹 なんだと？

抱月 晶子先生の才能を前に、あんたは書くことが出来なくなつた。くだらない自尊心や劣等感に囚われて、ウジウジと。

だがな。晶子先生の才能の源泉は何だと思う？

鉄幹 源泉？ あいつは生まれつき書けるんだよ。才能を持って生まれた。ただ、それだけのことだ。

抱月 俺は、この芝居の演出のために晶子先生の作品をすべて読んだ。そして、彼女の持つ言葉の源泉が全てわかった。

鉄幹 お前ごときに、わかるものか！

抱月 わかる。

鉄幹 何だ？ じっくりみる。

抱月 自分で考えろ。浪漫派の旗を立てた理論家なんだろう。

鉄幹は抱月に渡された脚本を読みだす。

そこに、ボロボロになった大杉がやってくる。

大杉 鉄幹先生！ よかった。見つかった！

鉄幹 大杉さん！ どうしたんだ！

大杉 話はあとです。早くしないと、晶子先生が、逮捕される！

鉄幹 なんだと？

——— 暗転

劇場。人の喧噪。そこに、白秋、いと、俊子、明、野枝がやってくる。

俊子 すごい人。さすが、晶子先生脚本の舞台ね。

白秋 それだけじゃない。気鋭の演出家、島村抱月の演出ですからね。

いと そして、抱月との許されぬ愛を貫く、松井須磨子の出演だものね。

俊子 話題満載。

明 私たちもご招待いただいて、よろしかったのでしょうか？
いと もちろん！ 同じ新詩社の釜の飯を食った仲です。

白秋 元、ですけどね。

俊子 こら、こんな時に余計な事を言わない。明さん、いいんですよ。晶子先生からのご招待なんですし。

野枝 それなら、大杉さんにも来てほしいです。

いと 野枝ちゃん。

明 そうね。でもあの人の事だから、いつの間にかここにいたりして。

俊子 ちがいない。

一同は笑う。

白秋　ところで、晶子先生はどこだろう？
俊子　来ているはずなんだけど。

白秋たちは行ってしまう。
ロビーの一隅に、釜ヶ崎と恵がやってくる。

釜ヶ崎　森軍医総監の動向は問題ないな。

恵　仙台に出張中で、変更はありません。

釜ヶ崎　予定通り決行だ。

恵　はっ。

釜ヶ崎と恵は去っていく。

そこに晶子がやってくる。

有島(声)　晶子さん！

声に晶子が振り向くと、有島がやってくる。

晶子　有島さん。

有島　よかった。凄い人出で、見つからなかったらどうしよう

かと。それより、考えていただけましたか。僕の、プロポー

ズの答え。

晶子　それは……。

その時、ドタドタと大人数が押し入ってくる足音が聞こえる。

いと&俊子　キャー！！

叫び声と共に白秋たちが走ってくる。

晶子　どうしたの？

白秋　先生！　憲兵が。

恵が走ってきて晶子たちに銃を突きつける。遅れてくる

釜ヶ崎。

晶子　あなたは！

釜ヶ崎　与謝野晶子――。

晶子　一体なんの騒ぎですか？

釜ヶ崎 通報があつたのですよ。この劇場内に無政府主義者・大杉栄によって危険物が持ち込まれているとね。

恵 現在、劇場は憲兵隊に包囲されている。これより劇場の一斉捜索を行う。観客は、全員退避すること。

ロビーは騒然とする。

有島 大杉君がそんなことするわけがありません！ みなさん、これは憲兵隊のデマです。

晶子 言いがかりよ！ あなた、この芝居を潰す気でしよう。

釜ヶ崎 公務執行妨害で逮捕されたいらしい。

釜ヶ崎は晶子を抑え込もうとする。晶子は必死に抵抗する。

晶子 乱暴はやめてください！

鉄幹(声) 晶子！！

その時、外から鉄幹が駆けてきて、釜ヶ崎を殴り飛ばす。

晶子 あなた！

鉄幹 こんな奴のいうことを聞くことはない！ 芝居を続ける！

鉄幹は晶子の手を取り、走り出す。

倒れた釜ヶ崎が起き上がり恵に怒鳴りつける。

釜ヶ崎 何をやっている！ 追え！

恵 ハッ！

逃げる鉄幹と晶子を釜ヶ崎と恵は追う。

鉄幹と晶子は物陰に隠れる。

晶子 あなた。また無茶を。

鉄幹 俺はずっと無茶をやってきた。何か変か？

晶子 いつも通りです。

その時、釜ヶ崎と恵が鉄幹と晶子に銃を突きつける。

釜ヶ崎 袋の鼠だな。

鉄幹 お前。

釜ヶ崎 与謝野鉄幹。あんたも、その女と同罪だ。逮捕する。
鉄幹 なぜそこまで憎む！

釜ヶ崎 お前たちの浪漫主義は人を弱くする。害悪でしかない！

鉄幹 それは間違いだ。真の浪漫主義は、人を愛する気持ち、明日を信じる気持ちを強くする。人は強くなる。

釜ヶ崎 聞きたくない。お前たち、逮捕だ！

釜ヶ崎と恵が、鉄幹たちに近寄ろうとする。

大杉(声) 待て！

大杉が現れる。

晶子 大杉さん！

大杉 大杉栄、今、この場で憲兵隊のみなさんに自首をいたします。

釜ヶ崎 貴様、正気か？

大杉 正気ですとも。この大杉栄、逃げも隠れもいたしません。

さあ、私を逮捕しなさい。そうすれば、演劇はできる。

大杉は両手を差し出し不敵に笑う。

釜ヶ崎 貴様。

大杉 私がここにいる以上、危険物はない。演劇は続行だ。

釜ヶ崎 演劇はやらせん。俺に刃向ってただで済むと思うな。

鷗外(声) ただで済まないのは君の方だ。

鷗外が現れる。傍らには白秋たちと有島がいる。

晶子 鷗外先生！

鷗外 汽車が故障して、仙台行が延期になった。

恵 (釜ヶ崎に) 嘘です。

有島 (小声で大杉に) お前、無理な注文を鷗外先生にやったな。

大杉 一応文学青年だったからな。鷗外先生、文学青年に甘いんだ。

その時、舞台上の幕が開く。抱月一座の輪唱が始まる。

「ああおとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、
末に生れし君なれば
親のなさはまさりしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四なでをそだてしや

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ、
旅順の城はほろぶとも、
ほろびずとも、何事ぞ、
君は知らじな、あき人の
家のおきてに無かりけり。」

——暗転。

恵に連れていかれる大杉。それを追ってくる明と野枝。

60

明 大杉さん。

大杉 平塚さん。

明 行かれるのですね。

大杉 仕方ありません。鷗外先生にも迷惑をかけましたし。それにお嬢ちゃんも、身体には気をつけて。

野枝 大杉さん……。

野枝は泣いている。

明 大杉さん！

大杉 何ですか？

明 私は……いつか、あなたが言ったような太陽のような女になります。暖かく、優しく包み、人々を癒す、そんな力強い、新しい女に！

大杉 そうだ。思い出した。あなたに似た鳥の名前です。雷鳥です。

明 雷鳥——。

大杉は明に笑いかけて、歩き去る。

野枝 明お姉さま。野枝は、寂しいです。

明 泣いていてはダメよ、野枝さん。私たちは、太陽を目指すのですもの、強く、優しい女に。

野枝 はい。

明 それに、明ではないわ。

野枝 えっ？

明 私の名前は雷鳥、平塚雷鳥。あの人が私に似ているといった鳥の名前。私は今日から、平塚雷鳥よ。

野枝 平塚雷鳥……とつてもいいお名前だと思います！

二人は行ってしまふ。

釜ヶ崎と恵がやってくる。

恵 隊長は今日の舞台を見て、どう思われましたか。

釜ヶ崎 つまらん。

恵 私には、あれが人を弱くするものだとは思えません。私は励まされました。

釜ヶ崎 貴様、口答えするのか。

恵 失礼します。

恵は黙って去る。

釜ヶ崎も後を追う。釜ヶ崎の目に涙が浮かんでいる。

二人が行った後、鉄幹と晶子がやってくる。

鉄幹 抱月には負けられん！ 鷗外先生のすすめで、巴里留学の話がある。俺は巴里に留学する。

晶子 巴里——。

鉄幹 君が俺の明星であるように、俺も君にとつての明星でありたい。巴里で箔をつけて、捲土重来だ。

晶子 勝手な人。

鉄幹 俺はもとより勝手な人間だ。

晶子 ようござんしたねえ。(かわいらしく)

二人、仲のいいシルエットになる。

遠くで、白秋、いと、俊子が見ている。

いと 鉄幹先生、巴里に留学と行って、いざ巴里に着いたら、

その日のうちにフランス娘に向かって「君は白バラの君だ。

ジュ・テーム」——。そうなるに決まっているって。絶対に

勉強なんかしない。

白秋 僕は展開が違うと思いますよ。晶子先生、結局巴里まで鉄幹先生を追いかけていくって。

俊子 ありそう。というか、本当に着いて行ったのよ。実はね。横浜港で鉄幹先生を見送った後に、汽車で先回りして神戸港で待ち受けていて、さらに小倉港でも、待ち受けていたんだって。どこかで、他の女を乗せるんじゃないかと、疑っていた節があるのよ。結局、他の女はいないことがわかり、小倉港で自分が乗り込んで、一緒に巴里に行ってしまう。

白秋 何と業の深い――。

いと でも、俊子ちゃん、少し話を盛ったでしょう。

俊子 ――少しね。晶子先生は、鉄幹先生と二度燃えるような恋をしたことになる。一度目は文学少女として出会い、作品を認められたとき。二度目は巴里について行ったとき。

白秋 二度では済まないかもしれませんね。

いと 二度あることは三度あるって言うものね。

俊子 いや、逆かもしれないわね。

白秋 逆というと？

俊子 普通の男と女は、出会った瞬間に一目ぼれをするでしょう。ところが、あの二人は、出会った瞬間に心中をってしまったのかもしれないわ……。お互いがお互いを、途轍もない力で引き合ってしまう……。生きてはいけないほどに――。

いと 二人は、心中したまま生きていくということ？

俊子 そう考えると、辻褃が合わない？ 鉄幹先生、晶子先生を守るために、明星を廃刊にしたけれど、ほとぼりが冷めるや否や第二次明星を出す気配だもの。二人とも、命以上のものがかかっているのよ

白秋 命以上のもの、ですか？

鉄幹と晶子、二人抱きしめあっている（シルエット）。

――暗転。

エ。ピローグ

暗い中。年老いた鉄幹が歩いている。

鉄幹 ここは、どこだ？ どうして俺はこんな所にいる？ 随分と、歩いて来たな。俺は、死んだのか？ そうか。死後の世界って奴は随分と寂しい場所なんだな。（振り向く）長い道だった。俺はこんなに歩いて来たのか。

鉄幹が佇んでいるところに、晶子が近づいてくる。

鉄幹 晶子か。ずっと聞きたくて聞けないことがあった。君が作品を生み出す源泉は何だったんだい？

晶子 わからないのですか。それはあなたへの思い。それだけです。

鉄幹 本当か？ それだけか？ おまえの人生は大成功だった。だが、俺は何一つ、作品を残さなかった。

晶子 いいえ。あなたは、のちに文豪と呼ばれる作家をたくさん育てました。鷗外先生は「観潮楼」という文学サロンを作り、後進の作家を育てました。あなたが創った新詩社は同じ働きをしたのです。

鉄幹 俺の仕事は鷗外先生と同じだったのか。

晶子 そうです。

鉄幹 鷗外先生は、名作をたくさん書かれたが、俺はろくな作品を残していない。

晶子 それは才能が違うのですから、仕方ありません。

鉄幹 才能の違い——。

晶子 才能、すなわち天分は、本人の問題ではありません。親かそのまた親によって、生まれるずっと前に与えられているものでしょう？

鉄幹 そうだな。今更、才能なんか、あろうとなかろうと大した問題だとは思わない。

晶子 私もそう思います。私はあなたを見ていて、とにかく楽しかった。

鉄幹 楽しかった——。

晶子 鷗外先生という月になろうとして、必死にもがいているスッポンの姿が。

鉄幹 俺は、鷗外先生という月になろうとしたスッポンか。

晶子 失礼なことをいいました。

鉄幹 そういわれると、スッポンのような人生だった気もしてくる。

晶子 スッポンでも、私はあなたを一身に愛することで、歌を詠み続けることができました。あなたは、私の明星でした。

鉄幹 俺はスッポンにして、明星か——。

晶子 さらに太陽でもありました。

鉄幹 太陽——。

晶子 あなたは、誰の目にも見えない場所、地球の反対側という遠い場所から私を照らしてくれた。だから、私は輝くことができました。

鉄幹 俺は、晶子という明星を照らす太陽——。お前そんなことまで考えていたのか。女はすごいな。

晶子 (笑う) ……。

鉄幹 何がおかしい。

晶子 あなたがお茶の水に文化学院という学校をつくったとき、自分がいったこと覚えていないのですか？

鉄幹 さあ、なんといったか。

晶子 女は偉大だ。日本の教育は、女の偉大さに気付いていない。これからは、女にも男と同じ教育をほどこす。そのために男女平等の学校を作る。俺が創る文化学院は、日本初の男女共学だ。

鉄幹 まさに、俺がいいそうなことだ。

晶子 そしたら、文部省のお役人がとんできて、そんな勝手はまかりならん。国に従わない学校には、一文も補助金を出さんぞって。

鉄幹 そうだそうだ。言われた。肩幅がカマキリのように細くて、目がトンボのように丸い役人だったな。俺は、すべてあいつの逆をやった。科目編成も国の指導にはまったく従わなかった。文壇から菊池寛、川端康成、佐藤春夫。画壇から有島生馬、棟方志功。音楽から山田耕作。錚々たる面々を集めた。あの時も、金を湯水のように使った。お前は、そのために手が腱鞘炎になるほど原稿を書いたな。(嬉しそう)

晶子 そんな、嬉しそうに。私は手に何枚も湿布を貼って、痛みをこらえ、ほとんど泣きっ面で書いたんですよ。

鉄幹 (笑いながら) あのとときもお前には迷惑をかけた。が、国が補助金を出さんというのなら、仕方があるまい。男は自分の勝手を通すほかない。

晶子 男は自分の勝手を通すほかない、ですか？——その言葉、金輪際私の前で言わないでくださいね。

鉄幹 気にでも障ったか？

晶子 また、惚れ直してしまいます。

晶子が見上げると、宵の明星が輝いている。

地球の反対側では、太陽がおびただしい光を明星に送っていることだろう。

二人は、降り注ぐ明星の光に包まれる。

幕